

上野 伊州

上野

武藏國風土記

殘篇曰

豊嶋郡下谷岡貢鹿狢兔狸山鴿雉等又

五條天神宮

東叡山の巽の麓瀬川氏の比あり祭神少彦名命

一坐

北野天満宮を相殿とす

當社

東叡山のうちあり一實永寺草創の御連

歌師瀬川

億り宅比遷させらる

の夜白本神事を修行す

北國記行云 正月の末しうすの日の出に優遊し

五條天神と申さる折あり拵る芽原を焼く

響りをとてそりり草の初草とすの日の出に下る 竟惠

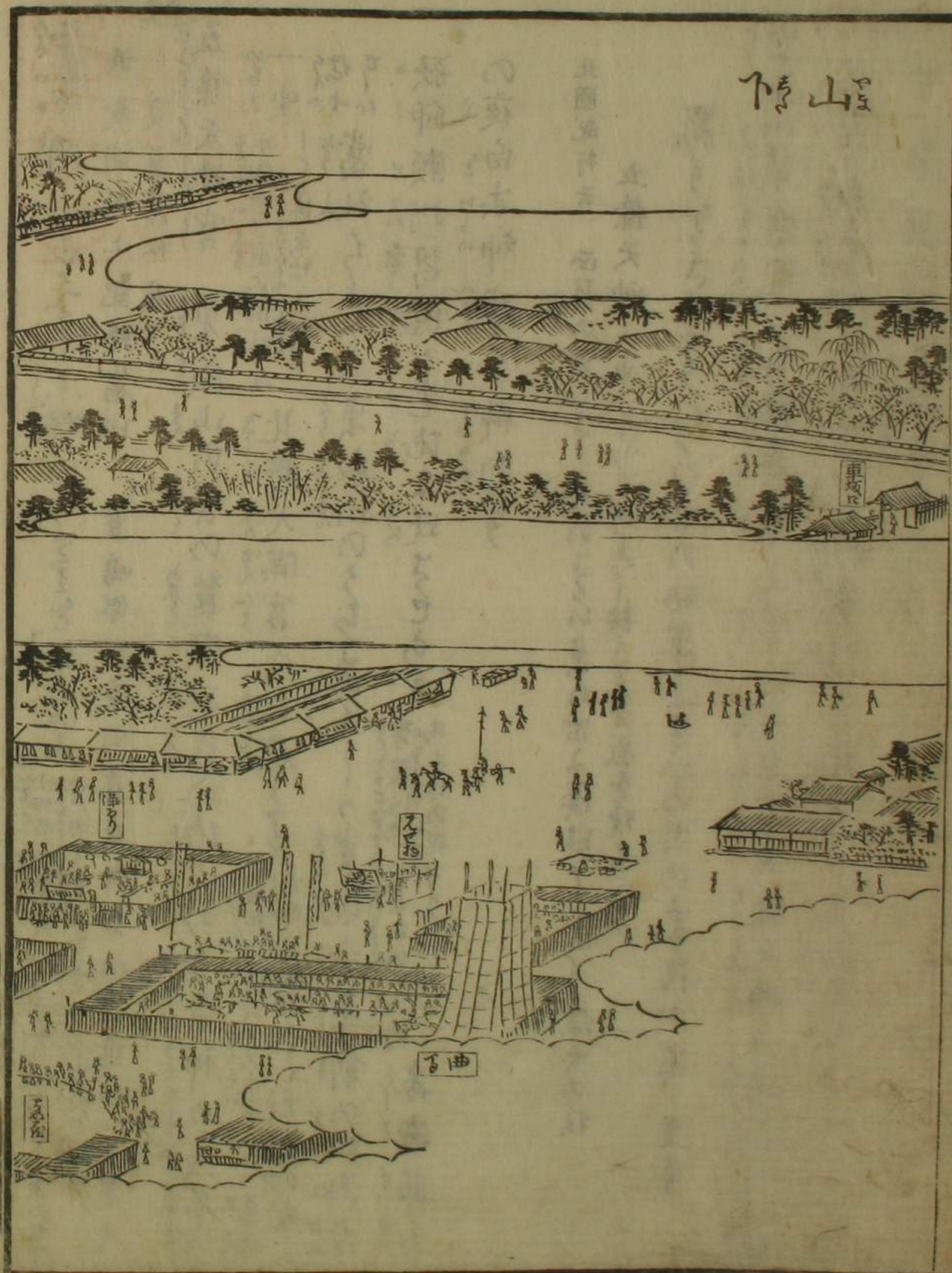
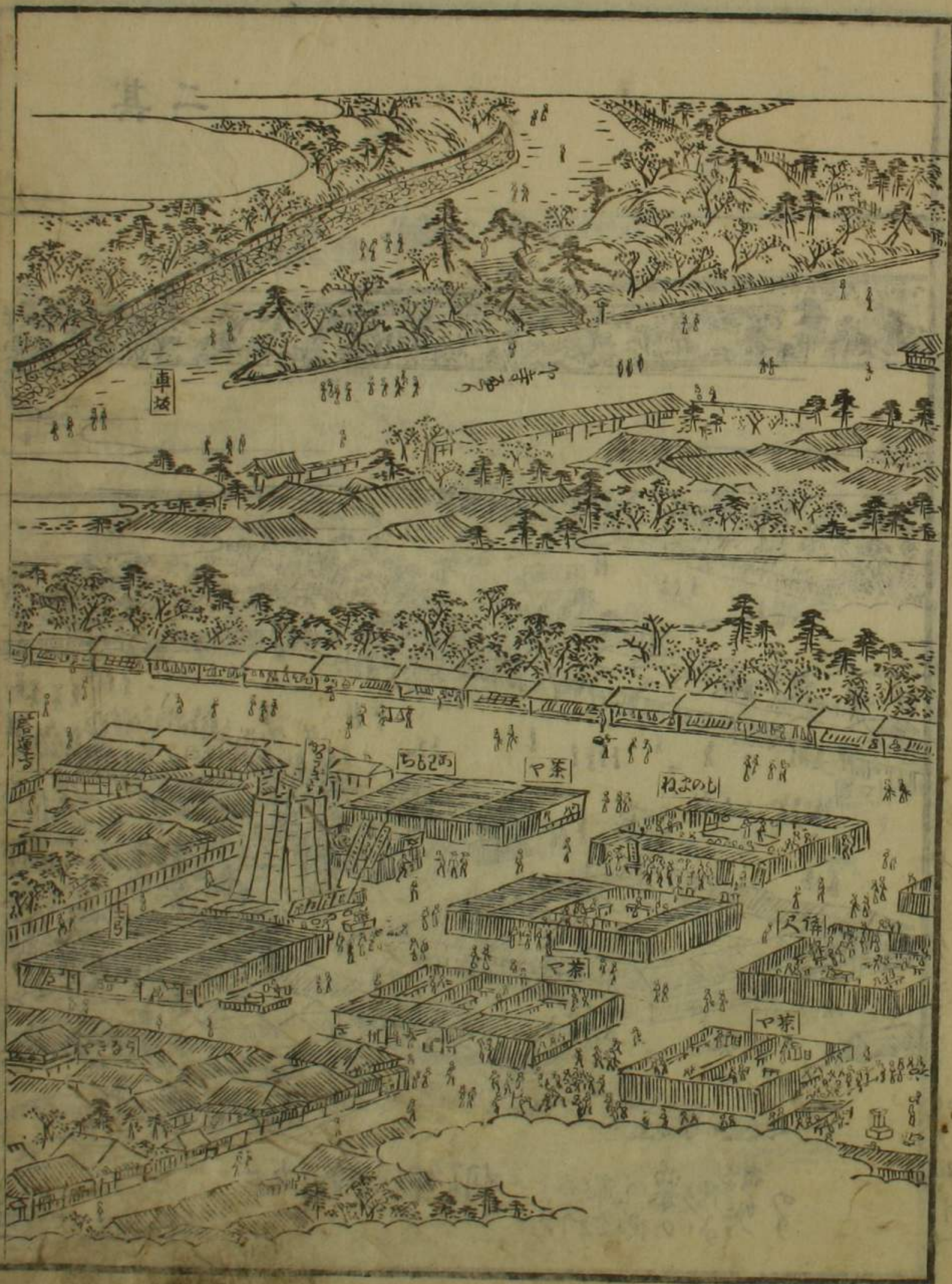
宝王山常樂院

長福壽寺と号と天台宗五條天神の南野川の向

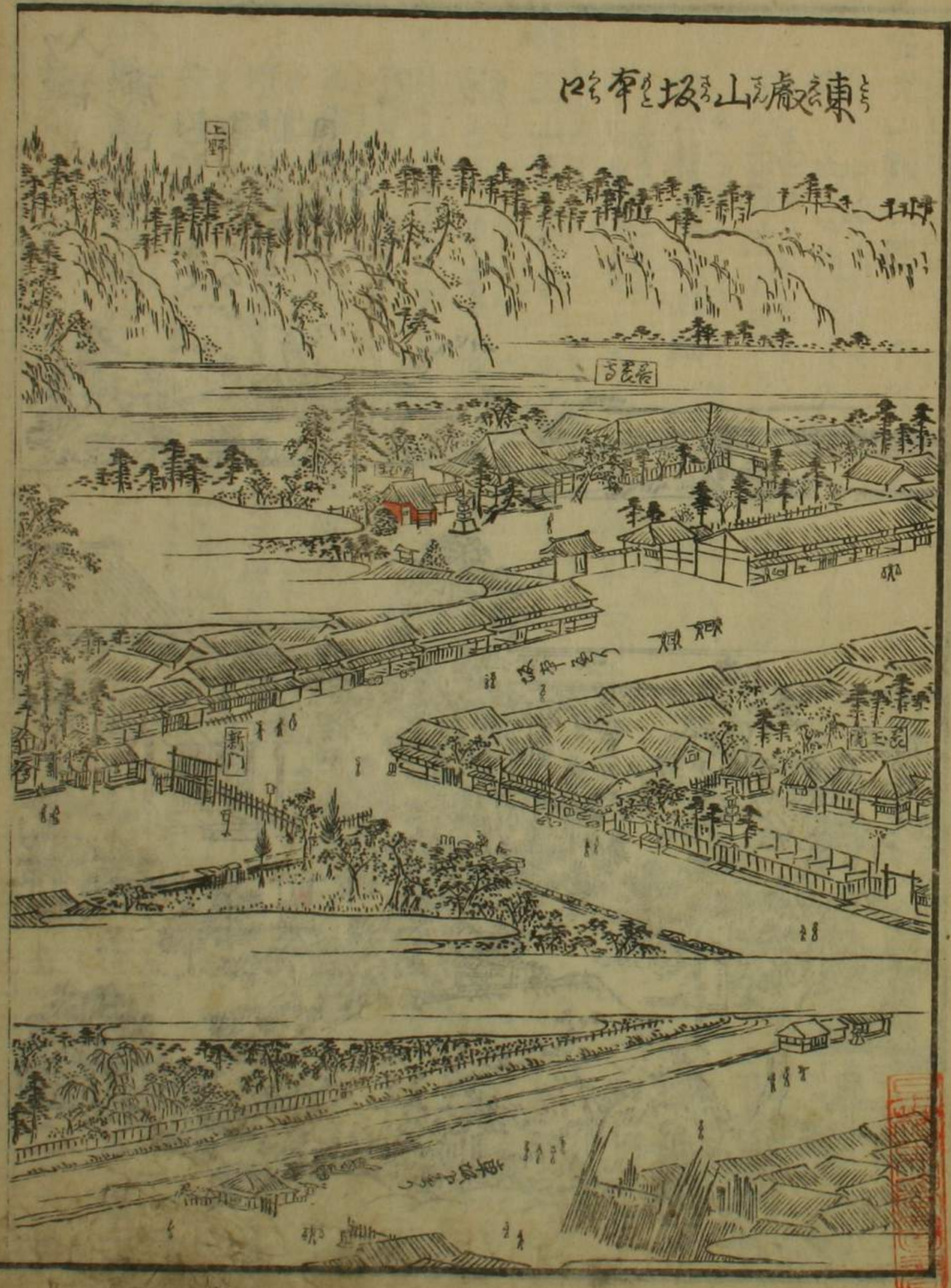
より奉る阿弥陀如来の行基大士の作りて西條院茅五番目

至二月八月の彼岸中甚賑なり

昭和九年
七月六日
終末



東叡山坂本



常樂院

六阿弥陀五音目
の世中賑ひ



入谷 庚申堂

喜宝院子母を
撰の仁天まの
青面金剛と
同位の靈像
ありと



金光山親王院

下谷坂奉壹丁目の南あり天台宗あり往昔今

の御城内大子の辺りありと慶長の頃今の地は遷すも往

右の三藐院と号するを宝永年間今の名を改むとつり當寺は釋迦

の涅槃像の画軸一幅を藏と上は慈眼大師の讚あり三四傳燈大

僧正天海書とあるとり毎年二月十五日是日洋とむ

藥王山善養寺

延壽院と号すと同石坂奉壹丁目の左例あり天台

宗ありて奉養の藥師如來を女と寺僧云此奉養の小野照崎明神の本地佛あり

當寺は天長年中慈覺大師の草創奉養も同大師

の作りといつて額に圓滿の二字を刻と黄壁本庵老人の筆あり

境内に彌魔堂あり彌玉の像の運慶の作り正月七月十日祭

諸羣集と

或人云く當寺彌玉の像は神代皇利皇孫あり

小野照崎明神社

同所三丁目の右例あり祭神泰儀小野翁との

靈ありといふを社傳あれとも詳れらるる始とよ畧と當社の坂





寺雨岡

岡所庚申塚と云るより三四丁良の方小川は傍より一株

の古松のりとは不動尊の草堂あり土人此松を御行の松と号す未由

始くらす省累と一小時雨の松とも云ふ

田圃雜記 多々の岡と云るありて松原のありある

あつちやと云て

霜の後あらはれふり雨をいよしの雲の松もひれ道典准后

按て其の由と云る東叡山の旧名なり此松も東叡山より連綿たれり田圃雜記よ出る

東陽山正燈寺

龍泉寺町あり

妙心寺派の禪刹なり承應三

年思堂和尚草創と

和尚大田山宝鑑圓軒と謚号す天性明敏なり大田 當寺

の後園桐樹多し

其先山出高雄山 晩秋の頃ハ詞人吟客ら小群遊し

其紅艶を賞と

真賞山西光寺

兼輪新町あり

浄土宗なり長和元年の草創

あり幸ぞ門跡陀如未ハ惠心僧都の作元山ハ蓮社賢譽上人たり

千束郷

龍泉寺町の辺今僅の地を

一ノ條堤と号す菊岡

佐涼の説は此地を佐々律見の里とも号くとある誤なりこの境は

叢祠あり千束編みと稱と

或人云性天の上下と云れは浅草天竺所の辺より千束の傍際迄をまゝく千束と云ひたりと云
仍て按て浅草寺至徳元年の撞の銘は武品豊島郡千束の金龍山浅草寺とあり又同
境内は西宮編みと稱するあり里老傳へて是を上千束編みと稱すと云小田原の赤松の
右文書は千束の内にて阿佐谷分三が石像等の地を在田形六郎因夜夜妙妙の地を在
田大徳亮同金杖の地を在飯倉陣忠因近藤孫の地を在島津孫七郎因朝倉分の地を在
江戸番匠等領するところなりと云其地の廣大なることを云へ

本戸三河守源孝範茅宅舊跡

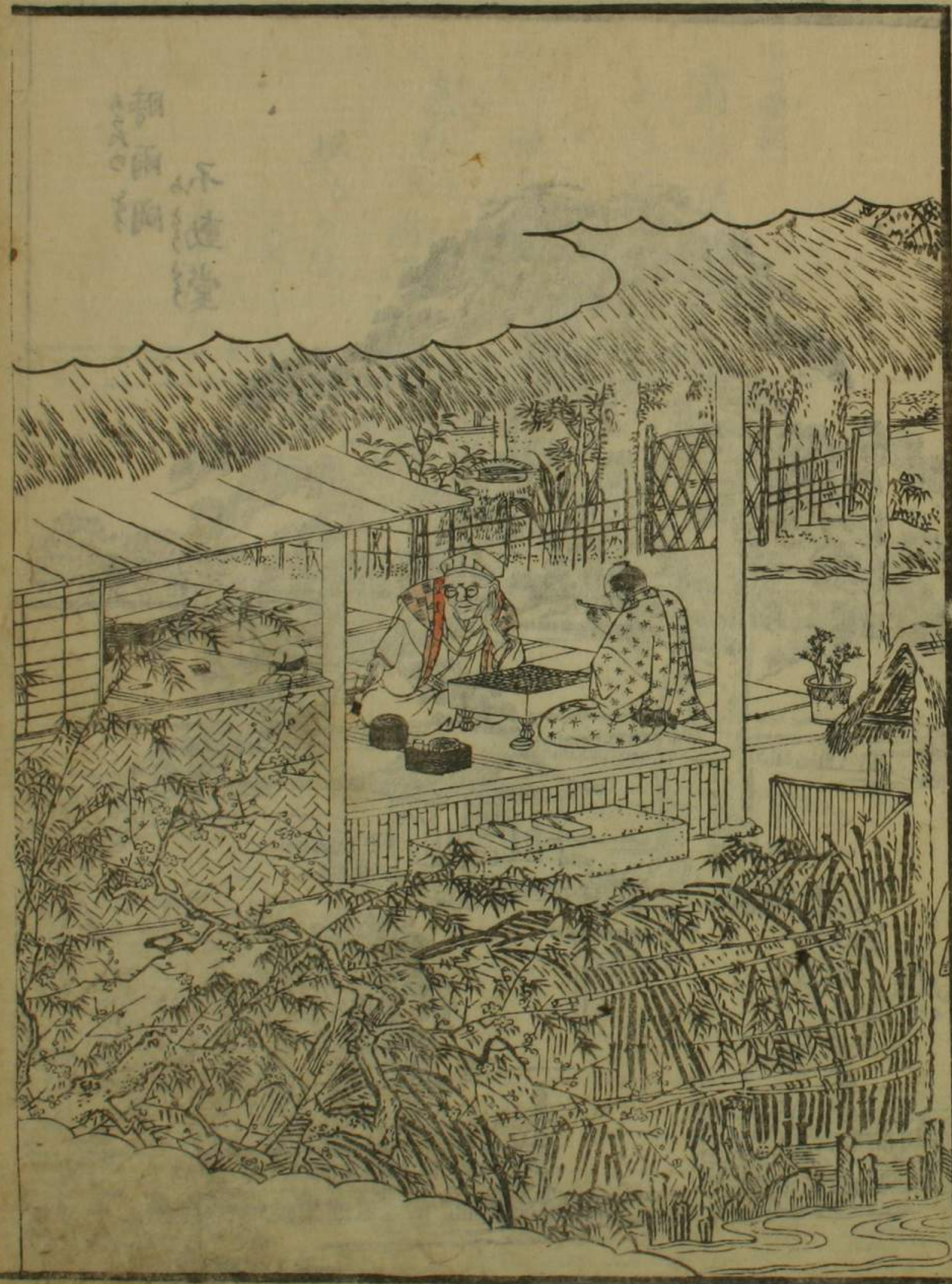
傳云今三河嶋と稱する地の三河守居

住の舊跡ある好まきつ号する

或云此地は細谷三河守と云人の

孝範家集云 此の國より千束の郡に入らむるあり住まへり
すんけいの一と云と散すく鹿の常なまきりる山をたれぬれぬしく
國をすまふ近てありは人のあり住たり夜ふけぬれぬれとすなまくと
まう一はのちたは夜ふけ物をそとすくたれとむすまう人の声
あつちの地を因れして申すやとあらをせとを命をひとの家

曉のふれりいするあけのこのあひうとつをまるとすらん
返し



朝雨
不遠
懐



名存ねき
吳竹の根存の里
上所の山蔭
幽趣わりの故
都下の遊人多
小隱棲と花
あき常水
桂ゆとり
産するの其声
ひとみあり

世に賞愛

いん

田國雜記

霜の後

あつたま

あつたま

あつたまの岡の

松も

あ

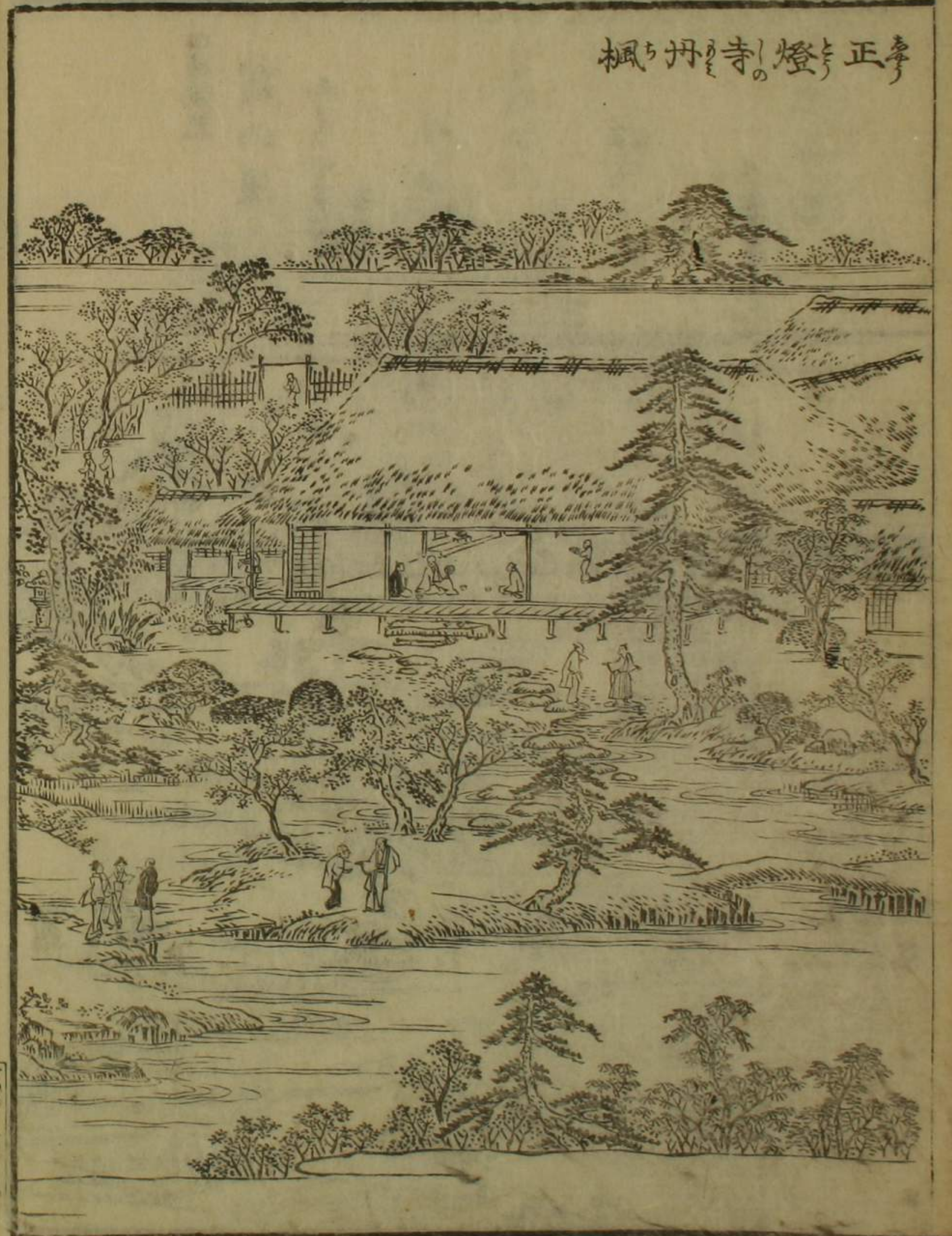
道真准后



時雨岡
不動堂



寺正燈の丹楓



庭中楓樹寂
妙わく〜〜
晩秋の紅錦ハ
海琴寺の園林
もも劣る色々
實〜一時の
奇観
159



軒近くきりきりしと宿とひき待て夜比のあひよとむさけ

梅花無盡藏云

木戸公号罷釣翁保和歌之正脉

余在洛而聳厥聲譽久之矣今也共寓武野之佳
境隅田之上流往還無虛月豈非天之至幸乎
賜詠歌三篇可謂暗投也聊奉攀未篇之韵脚云
二月十六日 文明二十七年乙丑
雪月寧非老年伴
隅田春色浪如花
鳥若知都我細問

梅は老範の事云云又梅花を云ふ所の序は本云を罷釣翁と号す其武野の
佳境隅田の上流に寓むと云うり合せ考ふまはる二何處の地かその跡跡を
本戸孝範の從五位下叙一前二何守と云又罷釣翁と号す今川
了俊の一族より云々田道灌東常縁及び正徹宗祇公致万里杯
と同時世の人なり鎌倉大草紙又孝範の冷泉中納言持お郎の
門弟あり云々双の哥人なりとあり同書又長祿元年實東の礼り
付て京都將軍家の舎弟左馬頭政智實東將軍の宣旨を云々
下向ありと云々の条下は供奉の人の中は此孝範の名あり
貞範建武二年

萬里居士寓居地 前記云々 萬里居士本戸孝範と号す隅田河の上流に寓すことあり
萬里居士諱の端九初花洛の萬年寺に入大圭和尚より從ふて其法
を受く禪機文材ありと名譽四方に揚る應仁の乱を避ては尤濃尾の
間ニ寓して後淳層の業を廢して自漆補居士と号す又一は梅花無盡藏
と稱して文明の末東武に遊る方田道灌養遇甚渥一権役して後濃
小歸王老を扱を曾て天下白二十五卷を著して文明中東遊の詩文集
あり梅花無盡藏と号す

藝田明神社 新鳥越小あり祭る所日辛武尊一坐たり當社の往古え
鳥越の地あり一正保年中今の所より移たり例祭ハ隔年六月十日
執行す

駿馬塚 同所南例竹某り別荘の中より傳云康平中原義家東征

山元
熱谷
田明
神社

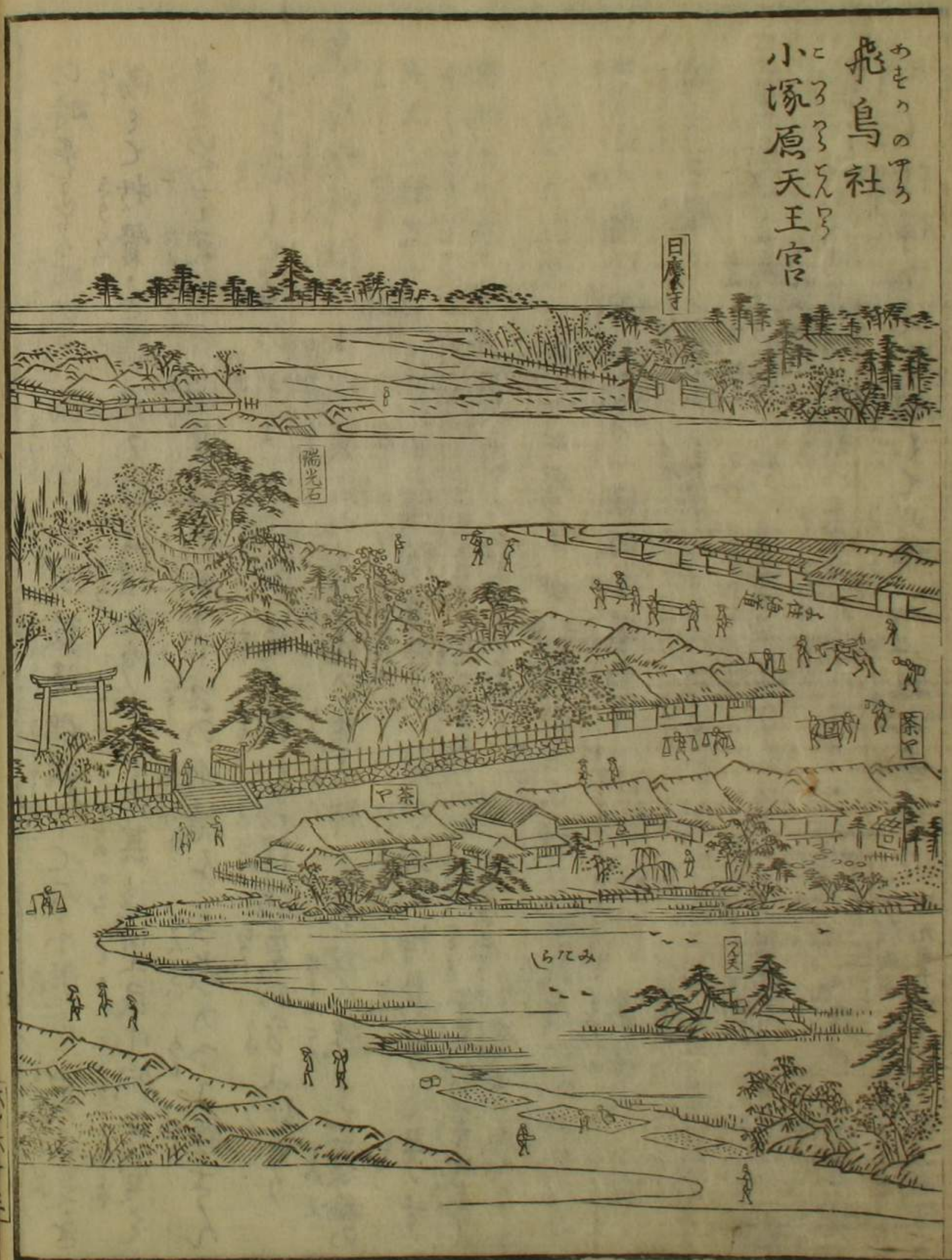


十ノ三ノ一ニ
ヨクニシテ
ゴクニ

駿馬塚



の時^{とき}是^{こゝ}より石^{いし}の青海原^{あせのうら}と^いひ^ふる駿^{うま}足^{あし}偶^ぐ病^{びょう}して^はら^ら小^こ巖^{いわ}を^と公^{こう}大^{だい}は^は是^{こゝ}を
 傷^{いた}て^は朽^く骨^{こつ}を^た釋^{しやく}路^ろの傍^{かた}に^う埋^うめ^られ^して^は其^{その}後^{のち}里^の民^{たみ}小^こ祠^{ほら}を^た營^いて
 建^たて^して^は又^{また}近^{ちか}き^所に^あり^て其^{その}地^ちの^あり^しる^の明^{めい}徳^{とく}を^た子^こ歳^{とし}の^あり^しる^の下^{もと}に^あり^て顯^あさん
 工^{こう}を^た致^{いた}して^は塚^{つか}の^側に^あり^て石^{いし}碑^ひを^た建^たて^して^は祖^その^い其^{その}塚^{つか}の^東の^{かた}に^あり^て迂^まり
 飛^と鳥^{とり}明^{めい}神^{しん}社^{しゃ} 小^こ塚^{つか}原^{はら}に^あり^て此^{この}地^ちの^産土^{つち}神^{かみ}と^いひ^ふる^の人^{ひと}混^まり^て兼^あ輪^{りん}の
 天^{てん}王^{わう}と^いひ^ふる^の列^{れつ}歩^ぽの^あり^しる^の聖^{せい}護^ご院^{いん}宮^{みや}未^まだ^して^は荊^{けい}石^{せき}山^{さん}神^{かみ}將^{しょう}寺^じと^いひ^ふる^の号^{ごう}す
 祭^{まつり}神^{かみ}大^{だい}己^ぎ貴^き命^{めい} 日本^{にっぽん}紀^き古^こ事^じ拾^{しやく}遺^い事^じに^あり^て大^{だい}己^ぎ貴^き命^{めい}の^御子^{みこ}なり^しと^いふ 事^{こと}代^{しろ}主^{ぬし}命^{めい} 古^こ事^じ記^きに^あり^て事^{こと}代^{しろ}主^{ぬし}命^{めい}の^御子^{みこ}なり^しと^いふ
 二^{ふた}坐^まり^て社^{しゃ}傳^{でん}曰^{いは}往^{むか}右^{みぎ}延^{のび}曆^{れき}年^{ねん}中^{ちゆう}比^ひ叡^いの^黒弦^{げん}師^し東^{とう}國^{こく}化^け度^どの^初此^{この}地^ちに^あり^て
 至^{いた}る^の小^こ小^こ篠^{しの}の^茂王^{わう}乃^{すなは}ち^は一^{いつ}堆^{たい}の^小塚^{つか}あり^し 此^{この}塚^{つか}より^いて^は此^{この}地^ちを^いて^は其^{その}塚^{つか}より^いて^は夜^よの^あり^しる^の
 瑞^{みづ}光^{くわう}を^み観^{かん}し^て白^{しろ}夜^よを^あ着^あり^て乃^{すなは}ち^は二^{ふた}人^{にん}の^名稱^な刺^さ棘^{げき}生^{せい}乃^{すなは}ち^は石^{いし}の^上に^あり^て降^{くだ}臨^{りん}あり^し
 と^いひ^ふる^の黒^{くろ}路^ろ師^し乃^{すなは}ち^は曰^{いは}く^は我^{われ}の^素蓋^{さい}鳴^{めい}命^{めい}の^和龜^{かめ}大^{だい}己^ぎ貴^き命^{めい}なり^しと^いふ^の事^{こと} 此^{この}地^ちに^あり^ては^は乃^{すなは}ち^は天^{てん}王^{わう}と^いひ^ふる^の稱^な
 又^{また}一^{いつ}人^{にん}の^名稱^な曰^{いは}く^は我^{われ}の^事代^{しろ}主^{ぬし}命^{めい}なり^しと^いふ^の事^{こと} 此^{この}地^ちに^あり^ては^は乃^{すなは}ち^は飛^と鳥^{とり}と^いひ^ふる^の稱^な
 仰^{あや}み^ます^の清^{せい}淨^{じやう}の^地を^あ撰^{せん}む^して^は此^{この}神^{かみ}一^{いつ}社^{しゃ}に^あり^て奉^{ほう}ず^とす^の事^{こと} 牛^{うし}改^か天^{てん}王^{わう}の^毎年^{ねん}六^む月^{げつ}二^に日^{にち}なり^しと^いふ^の事^{こと} 旧^{きう}九^く日^{にち}す^ては^は住^す大^{だい}橋^{はし}の^南傍^{かた}に^あり^し



依りて神幸ありて祭礼の権雲の天文十一年辛丑六月三日此日神幸
一基流れりて是より後此日とて祭日とせりと其神雲を奉揚し此日今神幸と
又後石の祭根を普く教化し生じし草草を用やくと 瑞光石 奉社の石の方小塚の上
二林老翁神化し石上りて現しとて考ふるもよとてあそくく上右の荒墓
らん

豊徳山誓願寺 惠心院と号を花鳥明神の北にあり浄土宗なり

奉りて阿弥陀如来を安んずる基に惠心僧都あり

寺傳曰僧都顯密の二教を究め於諸宗を渡り遂に休陀の本願

に歸入し往生要集等を著して大に自化を化せり

僧都上豆の慶祐法師と語りて曰く念佛の教いし東國に遊化し

を汝行し弘法とてなり仍慶祐法師命を受東國に遊化し

此地は未だ當寺を建立せし 中右頼破を増上せり

十八世了蓮社定普上人隨彼大和尚中興せり

一戒の文とてなり字仏の後の教ももれりといひ傳ふもらふ記と其文と云

惠心僧都勅依て泰内一稱讚浄土經を侍講申されり威感のあり奉りて

御衣を賜りて右在郷する母の御衣を授られし返りて是を榮りて

かれりなりし恨られし其文と

山登りてとて後わあひもられりてさかむをさかされりてとて道入と

衣のいろをわき君はじりてとてなりし御衣講讀し御布花のりたりたり

養のりてとてなりしをなれりてとてなりし御衣講讀し御布花のりたりたり

食のりてとてなりしをなれりてとてなりし御衣講讀し御布花のりたりたり

名々のりてとてなりしをなれりてとてなりし御衣講讀し御布花のりたりたり

わかれりてとてなりしをなれりてとてなりし御衣講讀し御布花のりたりたり

されりてとてなりしをなれりてとてなりし御衣講讀し御布花のりたりたり

のりてとてなりしをなれりてとてなりし御衣講讀し御布花のりたりたり

殺さるる御衣講讀し御布花のりたりたり

稱讚浄土經講讀し御布花のりたりたり

あつりてとてなりしをなれりてとてなりし御衣講讀し御布花のりたりたり

法師とてなりしをなれりてとてなりし御衣講讀し御布花のりたりたり

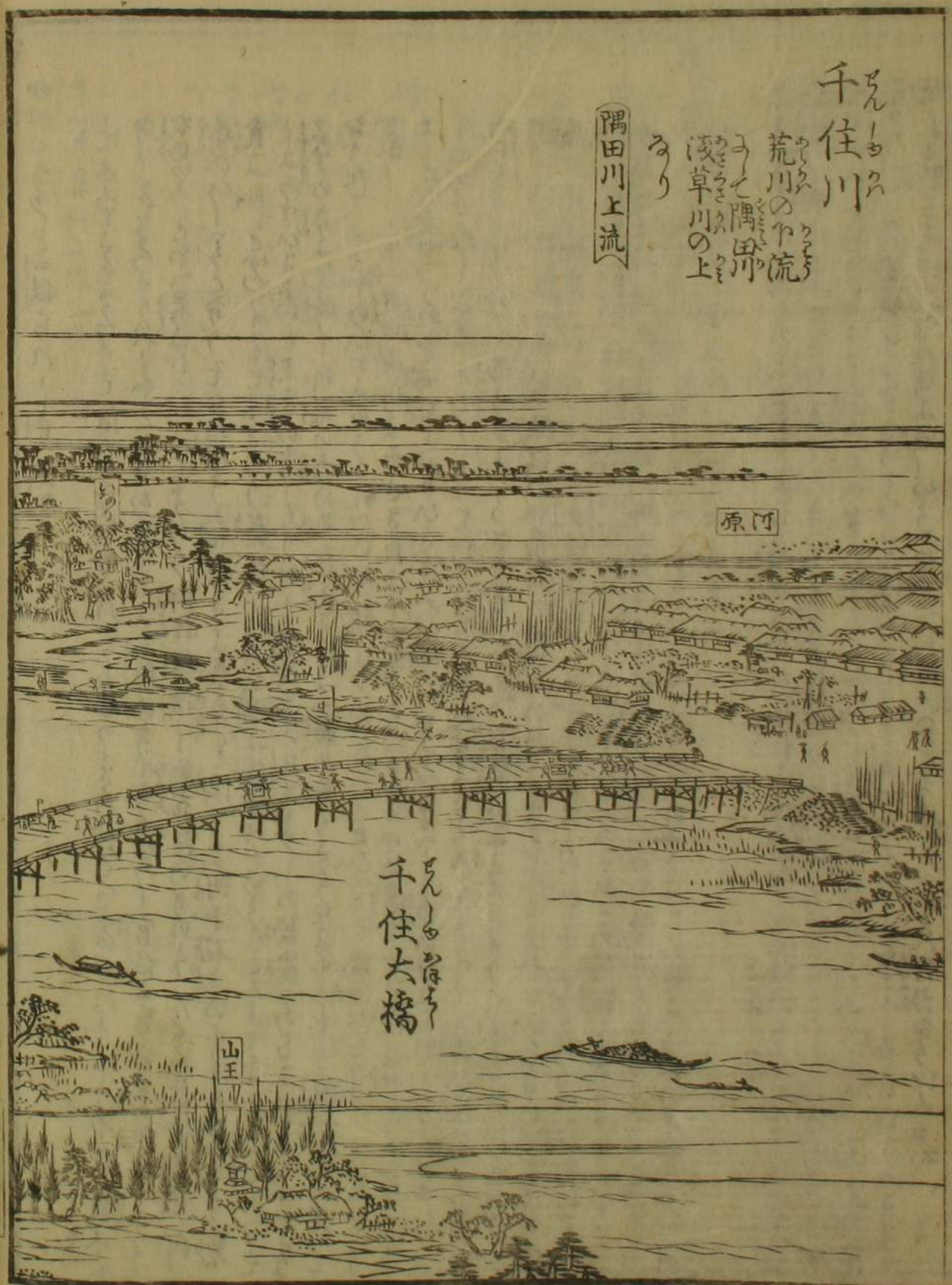
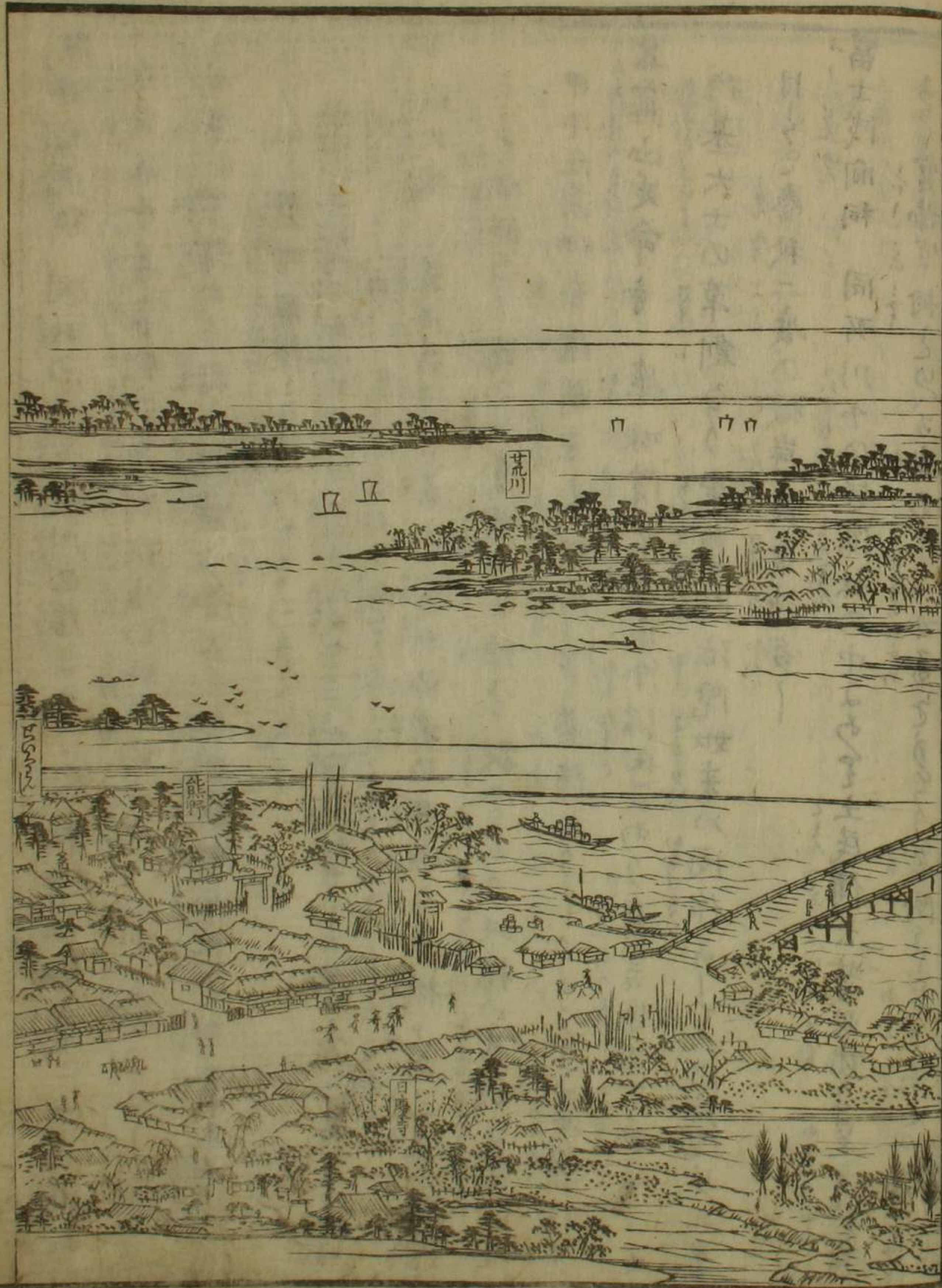
以上取意畧文

鳴呼買あるりて老婦ありて僧侶も後世を驚かすなりは政浄の念ありて往生

要集とて自ら志を利をなすなり是の僧法師権門勢家よりなりし御衣を

りため利をとりては老尼の筆のありてとてなりし御衣を

後れる物とてなれりて返りて後人のさかむをさかされりてとて



千住川
荒川の平流
隅田川の上り

隅田川上流

千住大橋

山王

原河

千住川

熊野権現社

同北の方千住川の端より祭神伊弉册尊一坐社傳云

永承年中義家朝臣貞朝征伐の時此地より灯を添へんとす

奇異の靈階あり故に鏡櫃に安じり紀別熊野権現の神幣を此地より

とめて熊野権現と稱してまつるなり

千住大橋 荒川の流に架むる奥州海道の咽喉あり橋上の人馬の絡繹

とて向断あり橋の北壹貳町を経る沢舎あり此橋の其始文禄二年

甲午九月伊奈備前守奉行とす普請ありより今に連綿たり

其露山延命寺 應味院と号す下沼田より真言宗の古刹より

行基大士の草創あり奉尊阿弥院如來の同作ありて六阿弥院第一番

目とて春秋二度の彼岸より祭詣多し

富士浅間祠 同所川下の方深林の中より土民傳云昔此地より足立莊司

あり宮城宰相といへる者あり一女子をとりて名附き足立姫といふ

才四番兩縁起より豊島をめぐり清光の女より二番目縁起より沼田の女より

三番目五番目より六番目縁起より足立後二位宰相藤原正成の女より

鳴左衛門尉ありあり者ありて一城にりんとす

縁起より沼田中捕のりて送りてあり三番目縁起

余木の弥陀等の縁起よりあり

外化あり故に是れを随つて父母強き婚姻を誓ふといへり

患へり竟る荒川より入るるを又沼田川とも云ふ住川の

侍女も又とも身を投て死

たり仍莊司悲歎し絶て又村人彼女子等の行跡のなかりしを稱し其日

六月朔日のみありて其靈を富士浅間と稱して一社に奉すといふ

ゆれとも其説未詳

浅間淵 同所の河淵をさしてありて是れ五姫溺死の所ありといふ

十二天女 足立姫の侍女の死骸を収めて十二天と稱し船方村の落守あり

餘木阿弥院如來 宮城村龍燈山住持寺より安を往右行基大士六辨の阿

彌陀如來の像を彫刻ありてその餘材を以て是れ造をたまひ草堂の

中より安置ありて遠く後明彦の項正菩薩吞和尚改り一字の梵刹とす



光茶銚
 千住の驛
 道の左側
 土人の昔老茶
 屋とも呼ぶ
 むろの茶
 銚の光澤の珠
 又勝たれぬ
 重たれ感賞
 あつかり下り
 此茶銚竟
 名物とあり
 其名さへ
 世に
 光る
 ありぬ



春秋二度の彼者
 多の六阿弥陀廻とを
 日わけの麗あるよ
 催さん都下の貴様
 老なる若きと打群は
 朝とく宅居をあとと
 夕とも行程まじり
 遅くはる春の月も
 長めくは秋の月も
 暮中
 母のつる



此地に住しつり則此寺の寢祖たる當寺は足立郡の墳墓と稱せり
あれども詳ありと

五智山總持寺 西新井村ありて真言宗より遍照院と号す弘法大師の

草創りて奉る弘法大師の靈像も同作るを靈驗著く毎月廿一日あり

寢張ありて奉請願母は 或人云尚寺弘法大師の靈像をその北徳真間山弘法寺に安置

阿伽井 幸堂の左の傍あり則弘法大師の加持水あり洗目眼等も用ふ

八幡宮 六月村ありて別當を空天寺と号す傳云八幡左郎義家朝臣

奥羽征伐の時此國の野武士とも道を遮る其時六月空天より味方の

勢勇く戦ひて空を氣色もあがりつり義家朝臣公中鎌倉八幡宮を

祈念ありしり不思議大陽鏡り如く光りて背に交われ敵の野武士も日

小ひり故に眼くらと大に敗北に依り此地は八幡宮を勧請ありと此

故に村を六月といひ寺は空天と稱し又幡正山と號せり
白旗塚 伊奥村田の中あり傳云往古八幡左郎義家朝臣奥羽征伐の時

此地は白旗を建凱牙を唱へつり此ありとを近頃返此塚上は小祠あり

其傍へ立寄りのあり崇あり故社荒廢をさしひられとも其傍へ再建も

てさつりつり今塚ありを存す 今も此塚の上は此地の田面を白旗耕比と

り又壘塚と稱せり五箇所あり 壘首實檢あり後其

萬徳山明王院 梅林寺と号す梅田村あり新義の真言宗より奉尊は

比叡菩薩を安んず寺記云當院は基志左三郎先生義廣の八幡左郎義家

の孫六條判官為義の三男あり 始常陸國伊出に住し後同國志を村にあり

榎戸一院を創基し祈願所とす 當院見り昔は是より先治承の頃頼朝初

義兵を起すの時義廣自主の志あり故に頼朝に隨りて初て小山小四郎朝

政が為り敗らる其後同左馬次義純の孫あり 蟄居しつり此梅田村に住し

外右の方と廊と室とつり住す 其裔常陸久廣 當院の傍に始りて天満宮

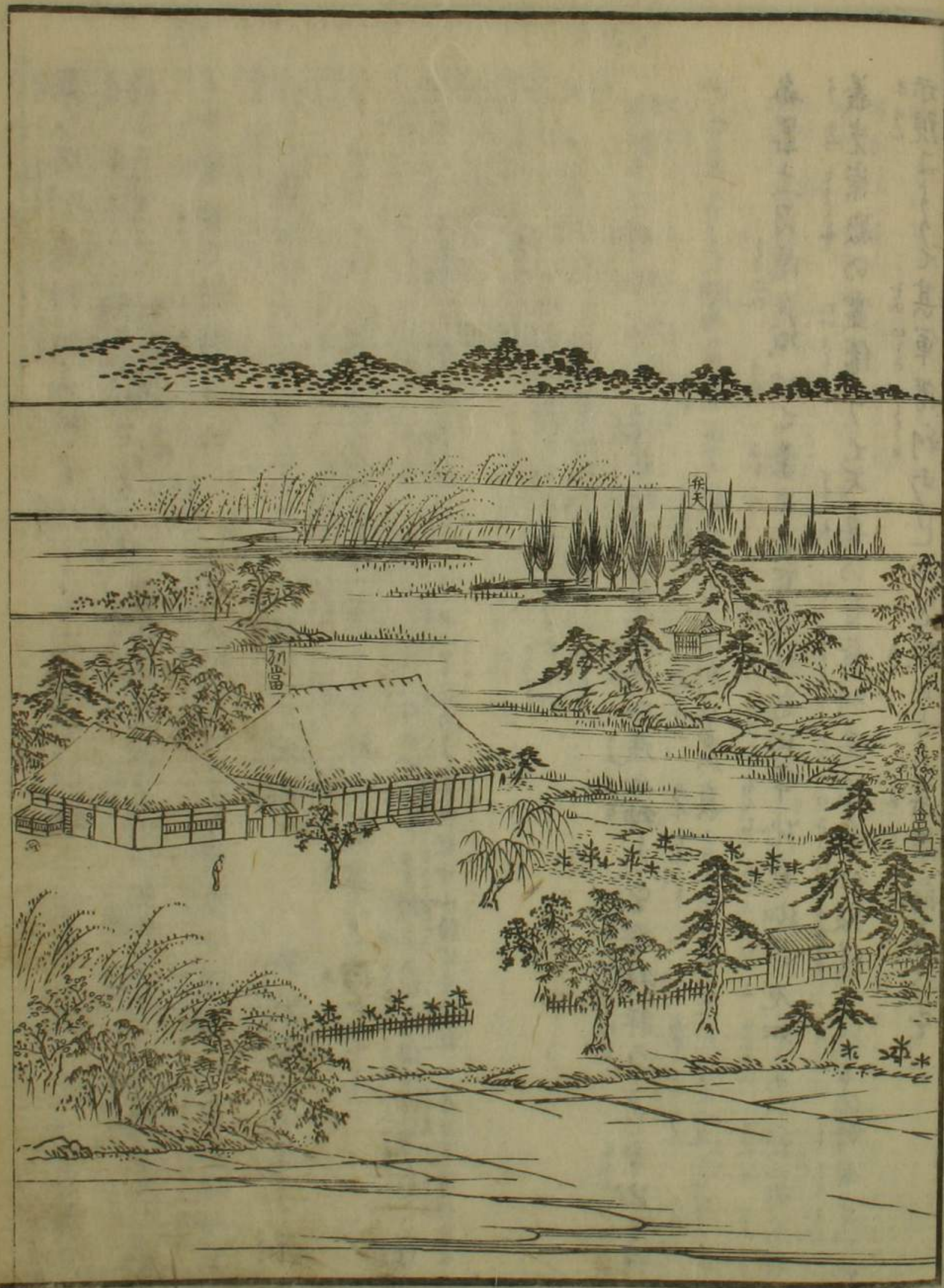
義純の茅宅の北ありとつり 勧請し鎮守とせり又神告し仍姓を梅田と改め小左郎と号す又遠く後

永正年間東大に乱る同左郎左衛門久義 小左郎久廣より十六代の孫同帶刀

久光の子あり後左馬次と号す 是を



西新井
大師堂
毎月廿一日
祀奉あり



梅田天神祠
 不動堂
 別當明王院



鷺嶋大明神社



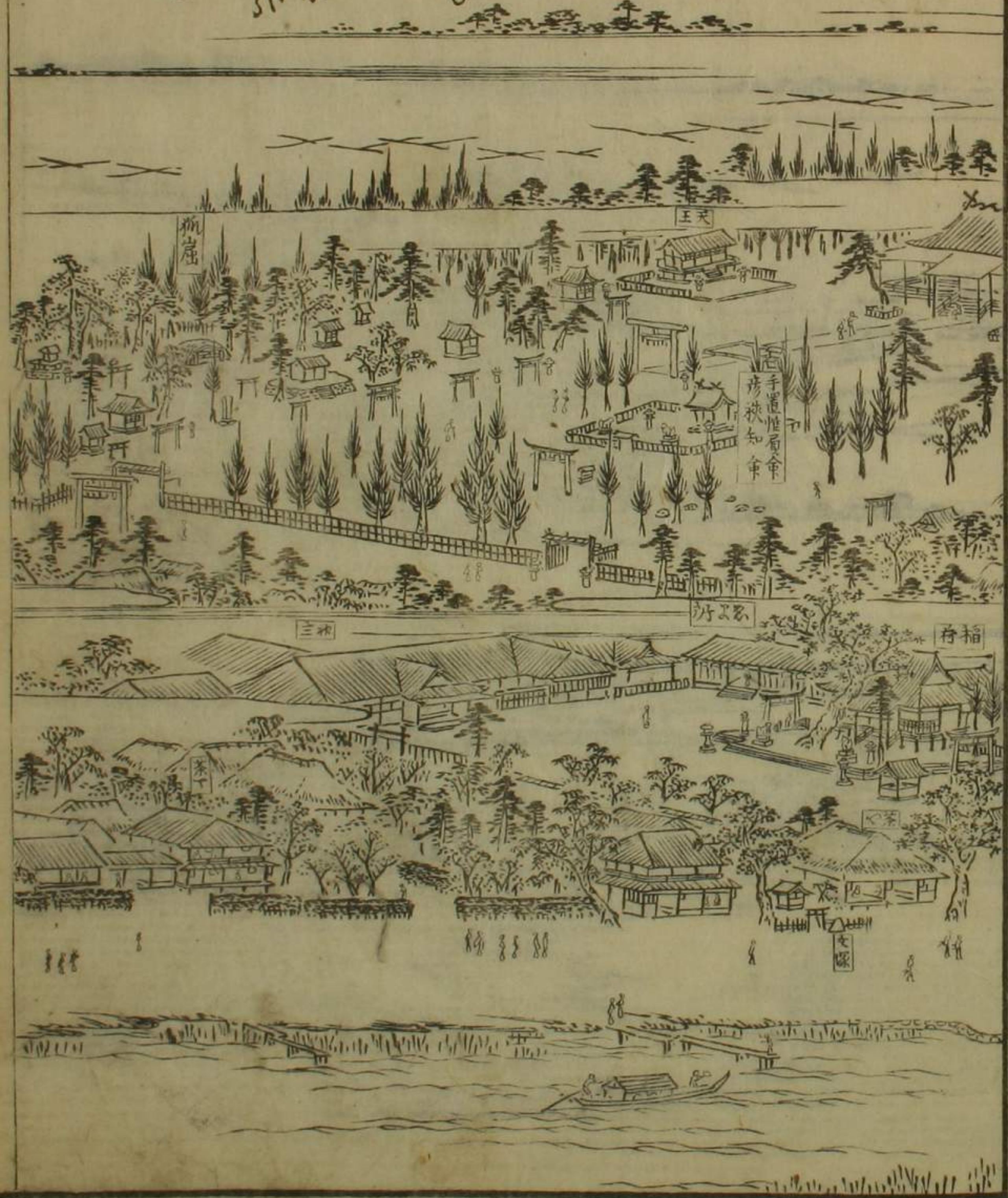
千葉公胤直上叔憲忠と護つれ又子兄弟共々一味して成氏と背く
 千葉公胤直上叔憲忠と護つれ又子兄弟共々一味して成氏と背く
 らよまゝに故千葉大助満亂り二男陸奥守入道常輝又子其の多岐下總國馬加の味
 より打て出成氏の味方となりて合戦を竟るに亨徳四年三月廿日胤直敗北
 其子胤直をよひ千葉入道常瑞舎才中勢入道了心等悉く切腹せしむる
 陸奥守の千葉へ移り千葉の跡を継ぎ然るに上叔よりの中勢入道了心の子息
 實胤自胤二人を取立下總國市川の跡に櫛籠らるゝを以て千葉家二流とれり
 總別大に現る其頃京都より東下野守常縁陸奥守退治として馬加の跡に
 向ひ攻戦ふ陸奥守ぬすして千葉へ引退く
 常縁の千葉公胤直の六男東六郎を夫
 胤直十世の孫なり時美濃國郡上の城主
 康正二年の正月成氏市川の跡を圍む同く十九日落城し
 實胤の武列石濱へ落行自胤の同赤堀へ移るる其後上叔家より胤直の一
 跡より實胤を千葉公に任りしむされと成氏陸奥守の子孝胤を長負あ
 りて千葉公居並にたる間
 孝胤の其父陸奥守入道常輝と共々故胤直兄弟を亡
 成氏に奉仕の人なり故成氏より千葉の跡を賜ふに
 實胤を
 城へ入るるゆれりとして武列石濱舊西邊を知行一時を待て居たりし世の

鷲大明神祭

毎年土月箇の日は
 神のすすむ世の
 近々の農氏家種を
 秋と祭終るの
 悉く浅草寺観音
 の堂へ祈り放つて
 舊例とす



何の
紫の
らよ
一本
茶
芭蕉



石濱
神明宮
隅田川西岸



うき旅の
 さらし
 流るる
 水の
 洞の
 道真唯后



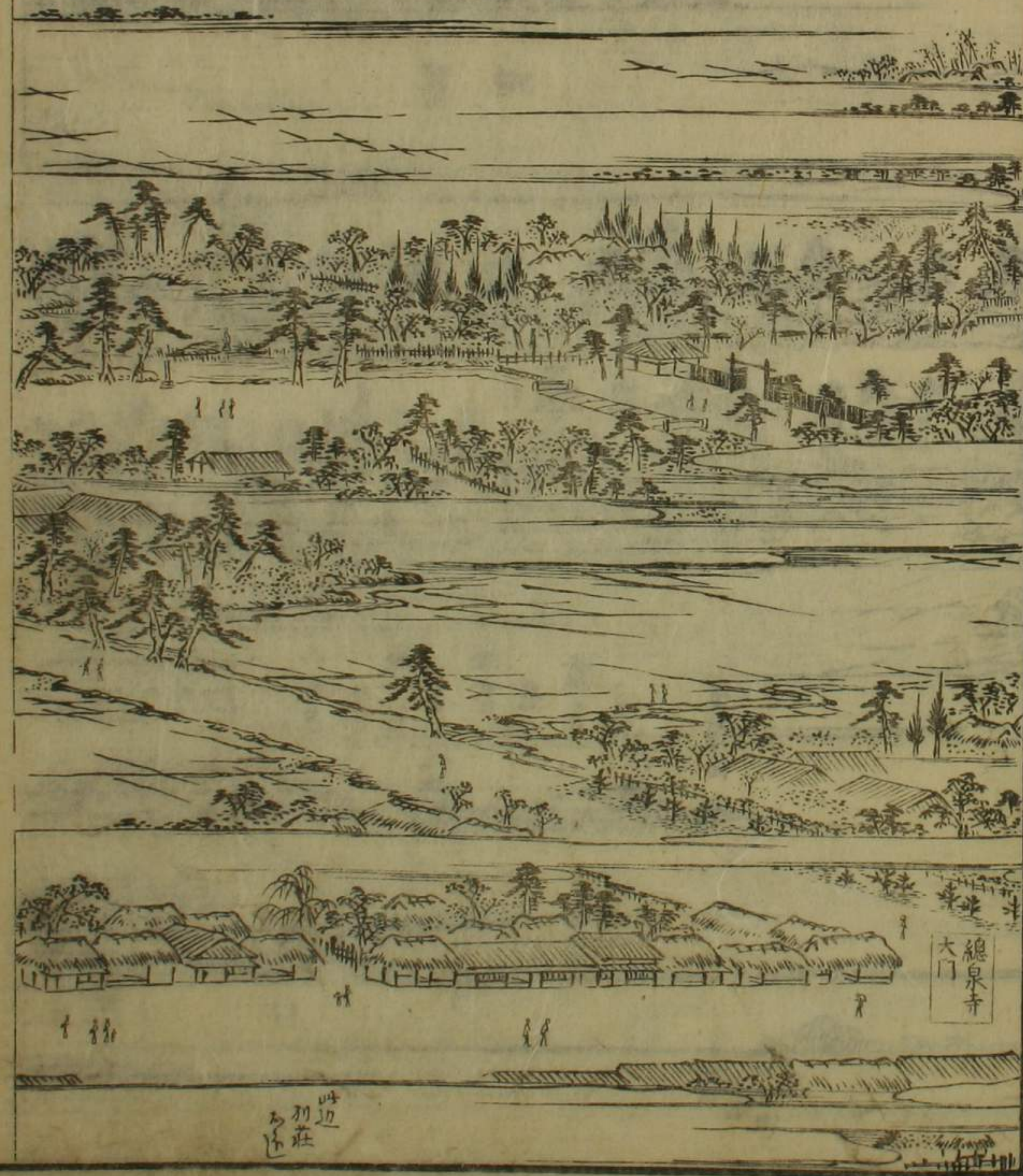
思河
 橋場渡



其二



其二



總泉寺
 不動尾
 藥師
 同





海芽の
 原
 焼
 の
 其角

玉源

堂龜

原の芽

海芽の神社
 玉源
 稲

其四



人わさ
 あれ
 海芽の
 原の
 霜を
 道真准后

此田
 列莊
 海

法源寺
鏡の池



其五

佐殿神所ありと仰られ本井隅田を打越て板橋より着めあり
隅田河に在
海村ありしゆの義経記の
云義よともあるなり
夫本抄

隅田河に在る今ここの身を浮橋のある世ありと云れ
光俊
其言は歎きいふ此河に康元元年鹿島社よりまうとくく角田川の渡とされ被り今も浮橋を
ワラシをせられあり又

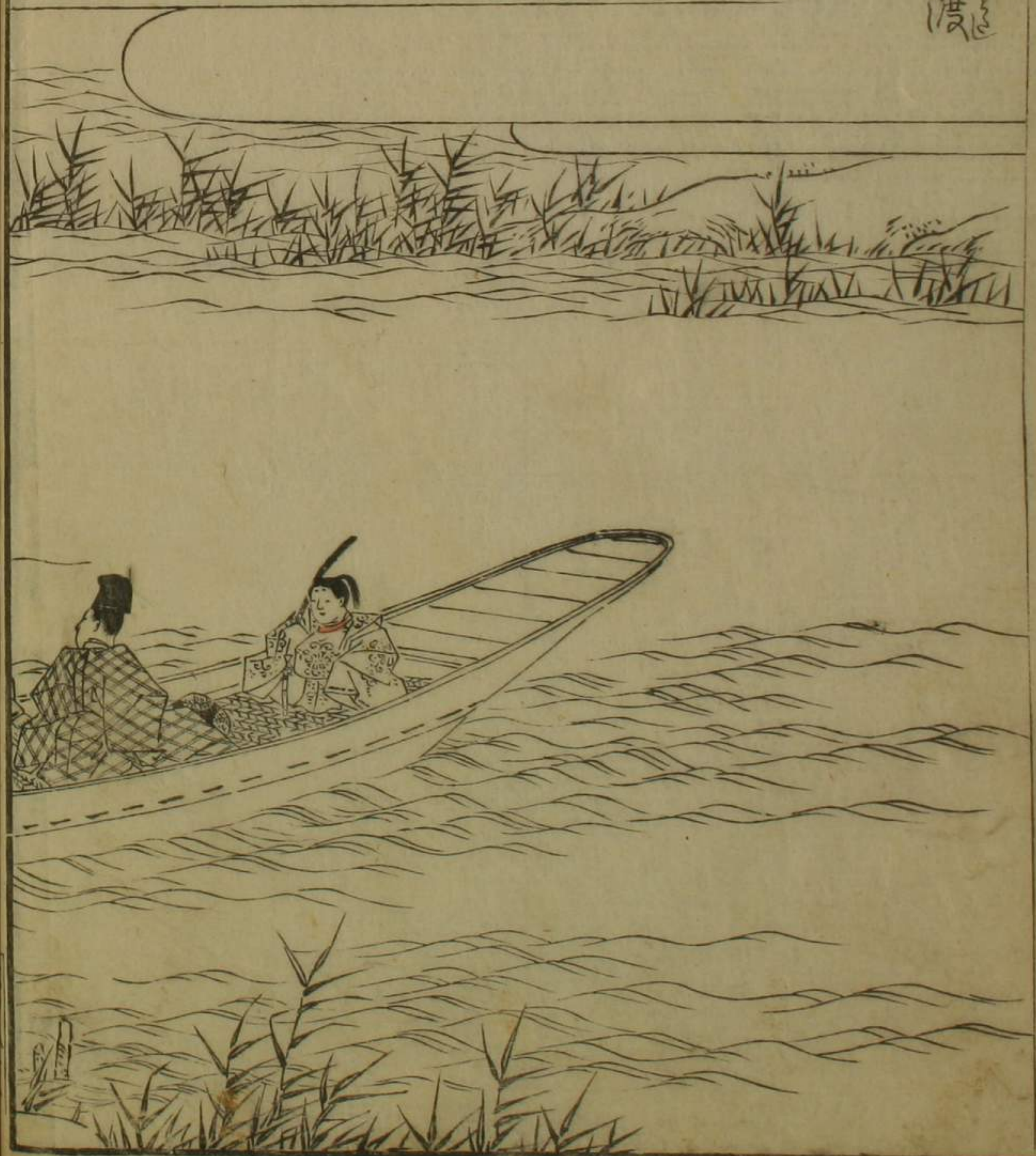
梅 花 無 蓋 藏 詩 註 云 隅 田 在 武 藏 下 總 西 國 之 間 路
傍 小 塚 有 柳 道 灌 公 爲 攻 下 總 千 葉 構 長 橋 三 余 云 云

朝日神明宮 橋場よわそ石濱神めとも
或人の説く此は伊勢宮あり
或信小橋場
神めとも早々祭神伊勢よ同く内外両皇古神宮坂新まつる社傳云

人皇四十五代聖武天皇の御宇神龜元年甲子九月十一日鎮坐と云
牛頭天王社 本社の左の旁あり橋場の法守と祭礼の毎六月十五日あり世に法入の押合
祭として神樂今戸橋をワラシと云る氏子の輩らとく神樂早も其神樂

角田河渡

名子
あつ
さ
官人
都鳥



家
あつ
ひと
あつ
とや

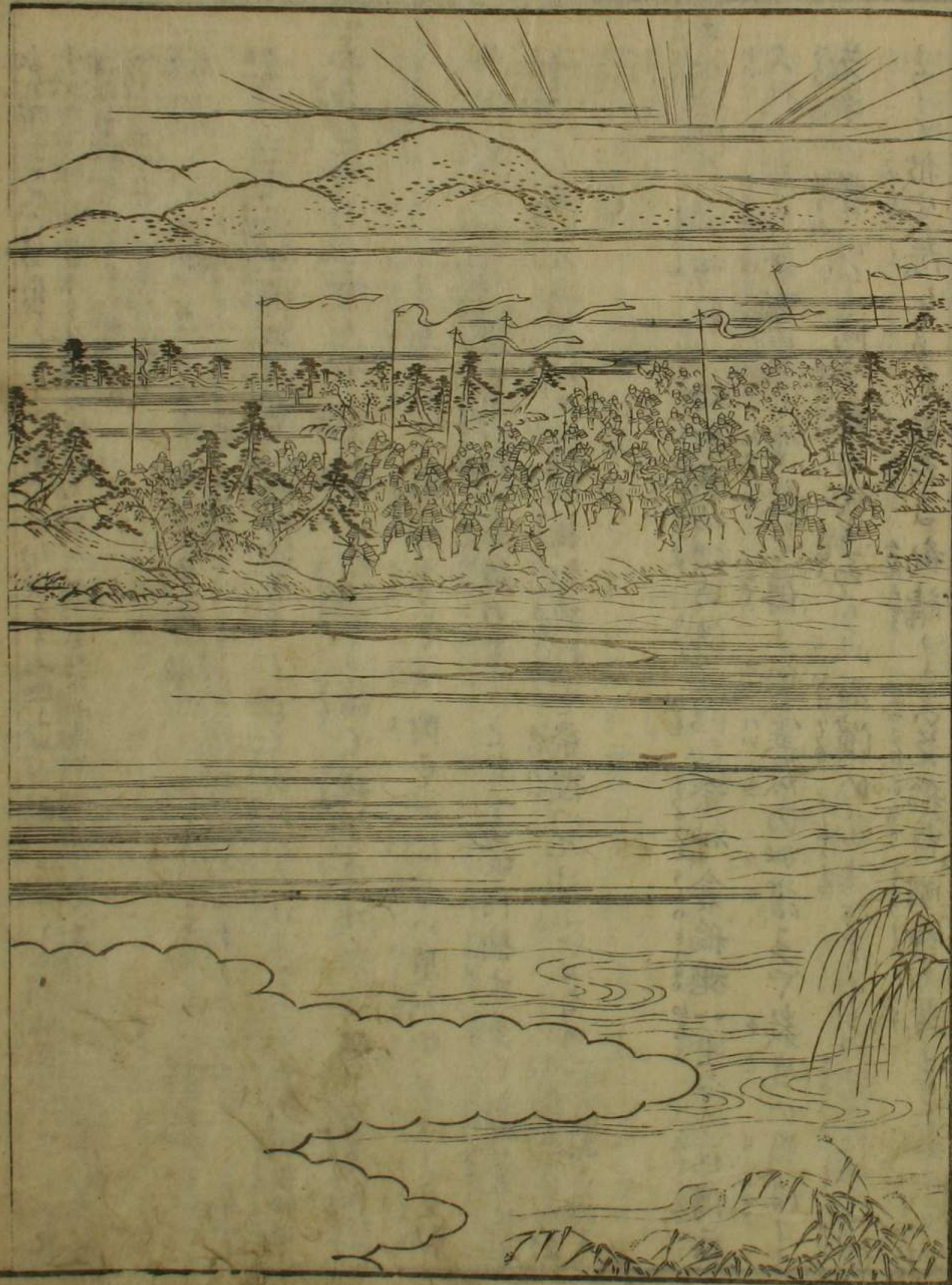
在原業平





志平の
正平七年
隅田河合戦之景





其二



母の川よりそりてよめる

うき後の道ふらうる思ひ川後乃神やあゆのまゆみ

道貞准后

隅田河渡

橋場より須田堤のりくへの古た渡るを今の橋場の渡と

唱

え録板の江戸鹿子と出る草紙より川の渡り今のところよりを川上ありと和のありき

古今集

むすの國とまらつあさの雲とあふあふすむのりよりよのりく

さひう母はえりれはあさう河のありよりよのりくさひかれぬさうあきさくもあさう
あさうれとあひひひてあさうあさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
あさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
あさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
あさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

吾妻の道の記 角田河ちりとさうて見よゆい今も解よ

これそらのあたまちをさう思ひらすさうさうの渡りけふ

とつてなそれとさうのまむすたうしれぬる身あらぬあゆも

ゆきさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

佛母とて云

夫本抄

夕霧小須田のワくく見え終るも舟人よりあゆみゆい

石濱古戦場

橋場の比とて石濱といゆるに似たり

新安手簡より石濱先生に渡の

右平記云正平七年壬辰閏二月

故新田義貞の次男左兵衛

御佐義貞之男少将義宗後父兄才在御つ義治義兵を記し其勢十萬

余騎よて武藏國へ打城たりとされよ依る將軍尊氏も鎌倉を進發し

敵を道よ待て戦を決らむと同十六日僅よ五百余騎よて武藏國へ發

向わると追よ小馳集る勢よとて八萬余騎たりとて同廿日武藏國の

小寺持原へ打て出新田足利の兩勢二十萬騎入乱て大に戦ひあつて足利方

の先陣急よ敗まて引退たりれの後陣をむむ勢よとて大に敗走よ義宗

自諸軍を牽て大よ呼て云天中のたよの朝敵より家あよ父の難言り

此戦よあつて尊氏之首をさうむし竹の時をり期よとて只二列兩の

大旗の列よなす小寺差原より石濱迄坂東道既よ四十六里を片時り同

小追身たり此時將軍の石濱を打渡虎口を道る猶將軍の兵

隅田河とあり

士残を止る先途を交る向は月も既の酒のりまよりて竹の瀧瀬も見え
りりさん義家あを續てつこまもあると又後よりはく味方もあるんやと
おのぬりのおれと牙をむけて卒陣へ引歸さへとのあを
以上右平記の意を據る

破尾不動院 檜場寺と号と渡功のすい南の方道より右あり天台宗

中へ淺草寺又属り 往古の法相宗ありり傳拍教田解の代長寛癸未歳より宗風を將とす 宝龜四年癸未良辨僧於

の上足寂昇上人當寺を完基し卒する不動明王の像を安ん

縁起曰卒尊不動明王の良辨僧都相別大山寺ふあり頃彫刻あり

三跡の一より彼寺の卒号と同本同作あり僧都一時上足寂昇師小告

て云く三跡のうち一跡は此山より一跡はさつり持念を殘る不の一跡

は汝に附屬とへ何方とも有縁の地よ安んとして有り仍て僧都化寂

の後 宝龜四年歳寂昇上人上總の方へ赴く道の次適此地より靈告を

得て有縁の地なるを志せり安ん則村老所人より草堂

を營み砂尾不動尊と号云砂尾藥師如來寺内より卒する

惠公僧都の作る 南無尊茶誦云く或説く此処より僧古砂尾僧都を夫といへり又

妙龜山總泉寺 曹洞派の禪林より江戸三箇寺の一員なり 元禄二年小田原山系茶の分限

宗俊和尚と号と當寺の千葉家の番花院あり 武勲石像の會するとのあり

千葉氏墓 境内卯塔のうらより長三尺の石の青石の梵字のを鐫めり年号は名不

昌燾大居士とあり寺僧云く守齋の弘治三年丁巳十月八日卒すとされ 守齋卒去の時四世とあり

今不立をたし 將此日茶の存るまに

宇津宮跡三郎入道墓 卯塔のうらより青石の碑二枚其一と云安元年

按て當寺よりははくしる不の法相宗三郎頼綱入道實信坊よりあり 又の号を蓮生と唱ふ

深空上人の法を繼て後善惠上人より我と出たると云え元年己未十一月京師より遺言より實を師

の石塔の傍に儼るより西山上人の法を見えり其地は則京師西山三法寺の東の坂より依て考ふる

又當寺より不の石のあり其の族より此辺よりありと云く建る不の墓碑より人なをされと云

餘年あり最不審少からむ

柳當寺の正法眼藏の妙理をたぬ實相在相の心印をひらく向上の一路

みけ着相實有の草を拂ひ言下の一喝より異學執解の塵を飛と云案
の床の前より一千七百の則を重て以公傳公を侍く坐禪の衾のりこと朝三
暮四の賜を得る文字言句の詠頭を離たす

浅茅原 總泉寺大門のあつりをつらみ

田圃雜記

人めさめれり林に夕まぐれ浅茅りくろの霜をワリク

道真准后

妙龜塚

妙龜堂のつらみあり青き一花の石にて長三尺あり碑面蓮花の上田圃の中は法阿と
云号をららことらりしは弘安十一年二月廿二日と彫るあり

古墳一基

云号をららことらりしは弘安十一年二月廿二日と彫るあり

巷茅四丁二ノ云ノ加禄二年六月廿二日此年三月廿二日此年三月廿二日此年三月廿二日此年三月廿二日
とて其夜は蓮花堂の傍より上人の檀を留り蓮生坊は信生坊は法阿坊は東氏の祖傳五位
道遍坊は法阿坊は東氏の祖傳五位蓮生坊は信生坊は法阿坊は東氏の祖傳五位蓮生坊は信生坊は法阿坊は東氏の祖傳五位
蓮生坊は信生坊は法阿坊は東氏の祖傳五位蓮生坊は信生坊は法阿坊は東氏の祖傳五位蓮生坊は信生坊は法阿坊は東氏の祖傳五位
蓮生坊は信生坊は法阿坊は東氏の祖傳五位蓮生坊は信生坊は法阿坊は東氏の祖傳五位蓮生坊は信生坊は法阿坊は東氏の祖傳五位
蓮生坊は信生坊は法阿坊は東氏の祖傳五位蓮生坊は信生坊は法阿坊は東氏の祖傳五位蓮生坊は信生坊は法阿坊は東氏の祖傳五位

鏡り沈

同所西南の方あり傳く云妙龜尼梅若丸の跡を去るひ京より

さ偏より来りし梅若丸身まじり此沈に身を投てむれり

あまねくとせ 傍小鏡沈庵と号する小菴あり

辨財天を安と是も妙龜尼をまつる不ありと云

架梁懸松

此の傍より一松を安け松とも云妙龜尼らの松の松に衣をうけ懸てむれり

采女塚

此の傍より一松を安け松とも云妙龜尼らの松の松に衣をうけ懸てむれり

名をそられと云りてらるれ椽澤のあとをめぐり沈より川ぬ

東野先生之墓

同所橋の通り福壽院とある禪林にあり先生は下野の人諱は煥圖東野を字とす
仁をとし移り安藤の養家の姓とす孝性な須氏より祖傳先生に就て大了
右文を編り昔は復古の字を唱へる墓の碑の銘を
南郭版夫子述る所なり其文をよむ

歸命山法源寺

無量壽院と号して浄業の古刹して總泉寺の南に隣り

宝龜元年庚戌の春智海法印始て此此に大日堂を建立せ其後延暦

三年甲子の秋村里の人民力を合て一字の梵刹とて砂尾石濱の道場

と号す 弘安十一年二月廿二日此年三月廿二日此年三月廿二日此年三月廿二日

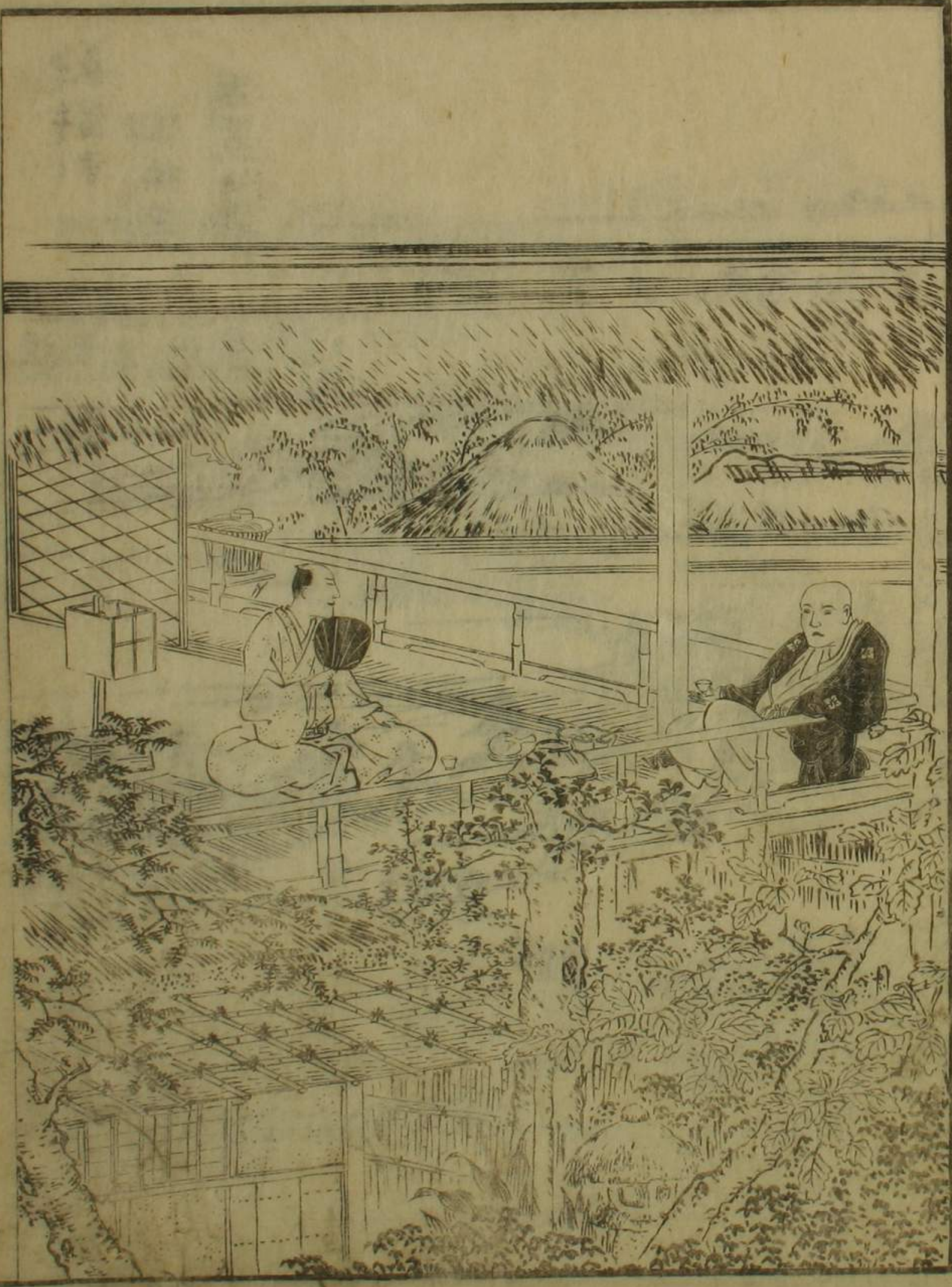
隆性院後二位藤原朝長四辻有理卿墓碑

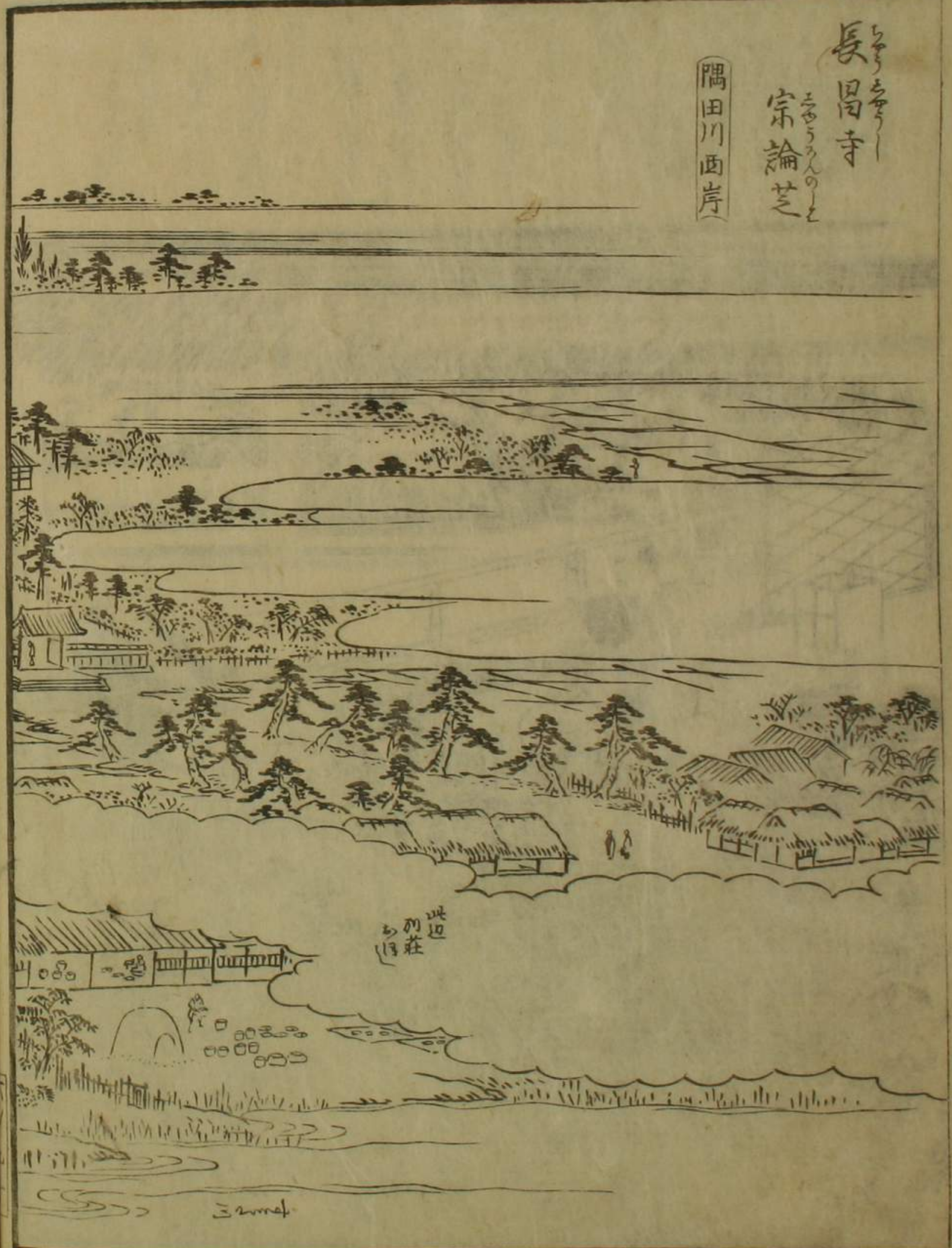
天六月廿七日とあるてりまの南南亭云く青石

其末由もさられぬと云 云寺傳もさられぬと云

浪元
雪意ハ
イロハ

水鶏ハ橋場の
のり及ひ佃場
を住境とせり
源氏物語も
あしふまむ社の
花紅紫のさへり
あふりのた
そとらうとらう
あしれるあしとも
あまもあはよ
あしゆのちんた
あしのちんた
あしとられよ
あふのちん
あふられ
あし





長昌寺

宗論堂

隅田川西岸

此辺
河莊

三二四

小戸一別當の天台宗より七松林院と号し祭禮ハ毎年八月十五日

放生會を後行す

社記曰源頼義朝臣義家公と共に勅を奉りて奥州安倍貞任宗任を誅戮

しゆの仍康平六年癸卯八月其祈願より鎌倉由比郷をよひ此今戸の

地に至り石清水八幡宮を勧請あり今戸社記云今律より作る小田原北条家の分限帳より

按律戸の通音あり本内宮内少輔野領石清水今律と云此名を如へらる

其後奥州武衛宗衡兄弟叛逆の時も義家朝臣鎌倉鶴

岡より此當社八幡宮等より祈願ありて賊徒を亡し勝利あり故永保元年

辛酉兩社の後造を加へられ行基彫造の跡陀を以ての本地佛より又同作の

茶所をよひ慈覺の作の観音等の像をも安置ありとあり其後文治五年

右大將頼朝公奥州の泰衡追討より進発の時も此御神より祈誓ありて勝利

を得ありて建久元年庚戌下河辺庄同行平を奉行より宮社を重建あり然

小寛永十二年丙子台命を奉り舟越伊豫守八木但馬守等是以司

王當社御再興ありより己降神光見く小新の靈威月々盛なり

今戸
八幡宮
隅田川西岸



今戸焼

此邊既者
陶器通ありと
是と産業
ととるれ
世よ今と焼
と稱と

元禄二年七月
三音隅田河
流り

おさこひを
けりあて
ほりれい

かのねま

露

いとむ

巾尾

秋風



靈龜山慶養寺

同く南の方今戸橋の北の結あり曹洞派の禪刹あり

宛山を明山良察和尚といふ

昔の元鳥越西福寺の隣あり後幸あふり
總門の額靈龜山

の二字の願齋の筆れを辨財天社境内あり本寺の弘法大師唐より携来の

靈像ありといふ

伊丹左京丹波女といふ二人の仕士故ありて討果たりあり

真土山

今戸橋の南の結ありまて待乳と作を或信土と作る万葉集亦打

亦打山暮越行而廬前乃角太河原爾獨可毛將宿

建保名所百首

今宵まて誰者めらん庵崎の隅田河系の秋の月ゆき

弁基

月影のさそや菴崎すそ河越まらちや山のゆひよき

須徳院

誰よあもやういといまら山夕越行のあふ人もれ

家隆

ほけら山夕越行の風寒そすそたのあふも鳥れくる

定實

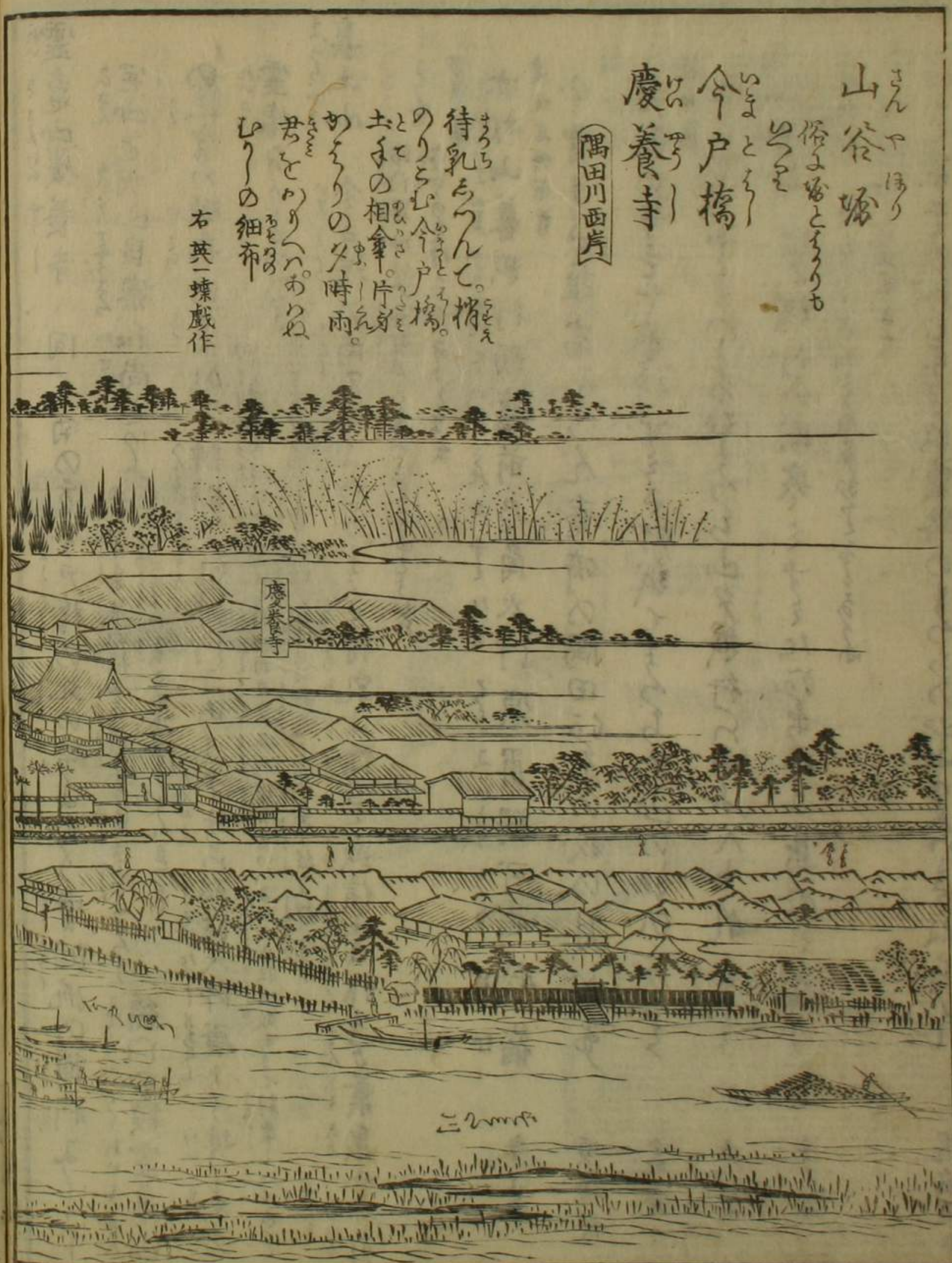
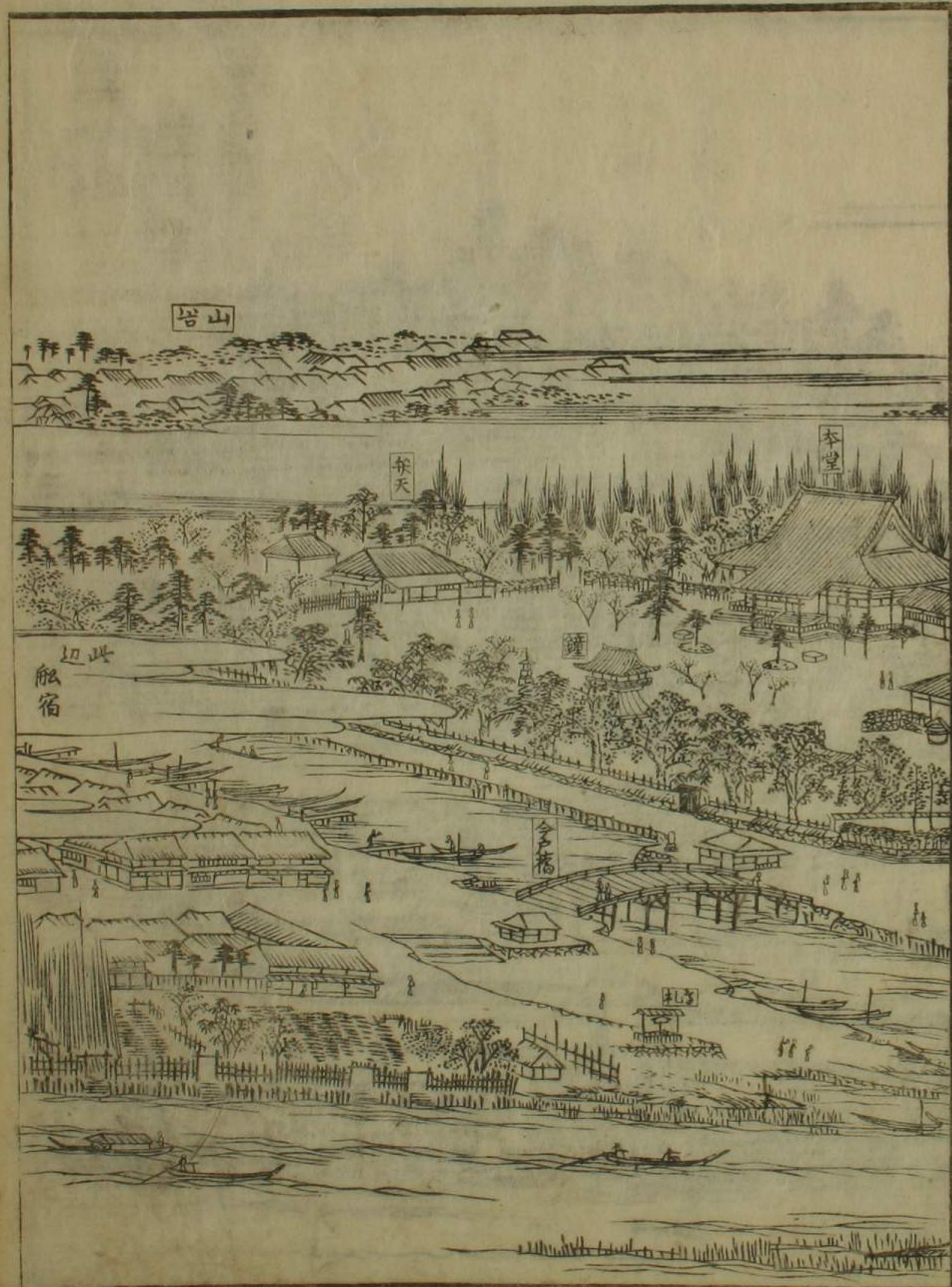
秋風抄

季廣

同國雜記 道玄らるる名不とも多あてをある

のそあそりのちもをうぬ東路のまらちのゆふのまぬらん

道真准后



さんやほり
山谷塘

俗よ俗とさうりも
りつそ

いまとく
今戸橋

いよ
慶養寺

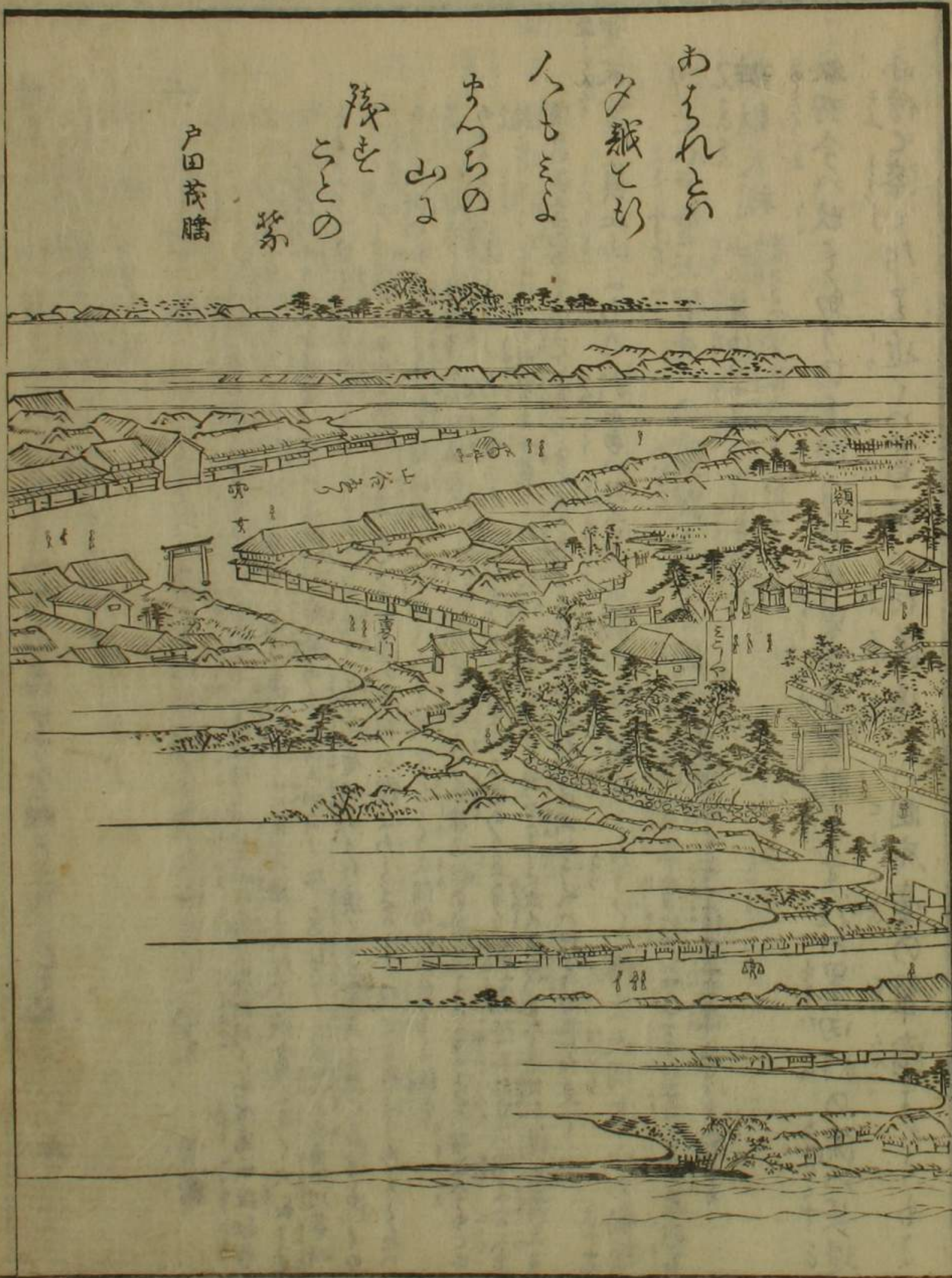
(隅田川西岸)

待乳らつんと。梢
のりらむ今戸橋。

土手の相傘。片
あさりの夕時雨。

君とりのへあひぬ
しりの細布

右英一壠戲作



戸田茂膳

紫

この

後

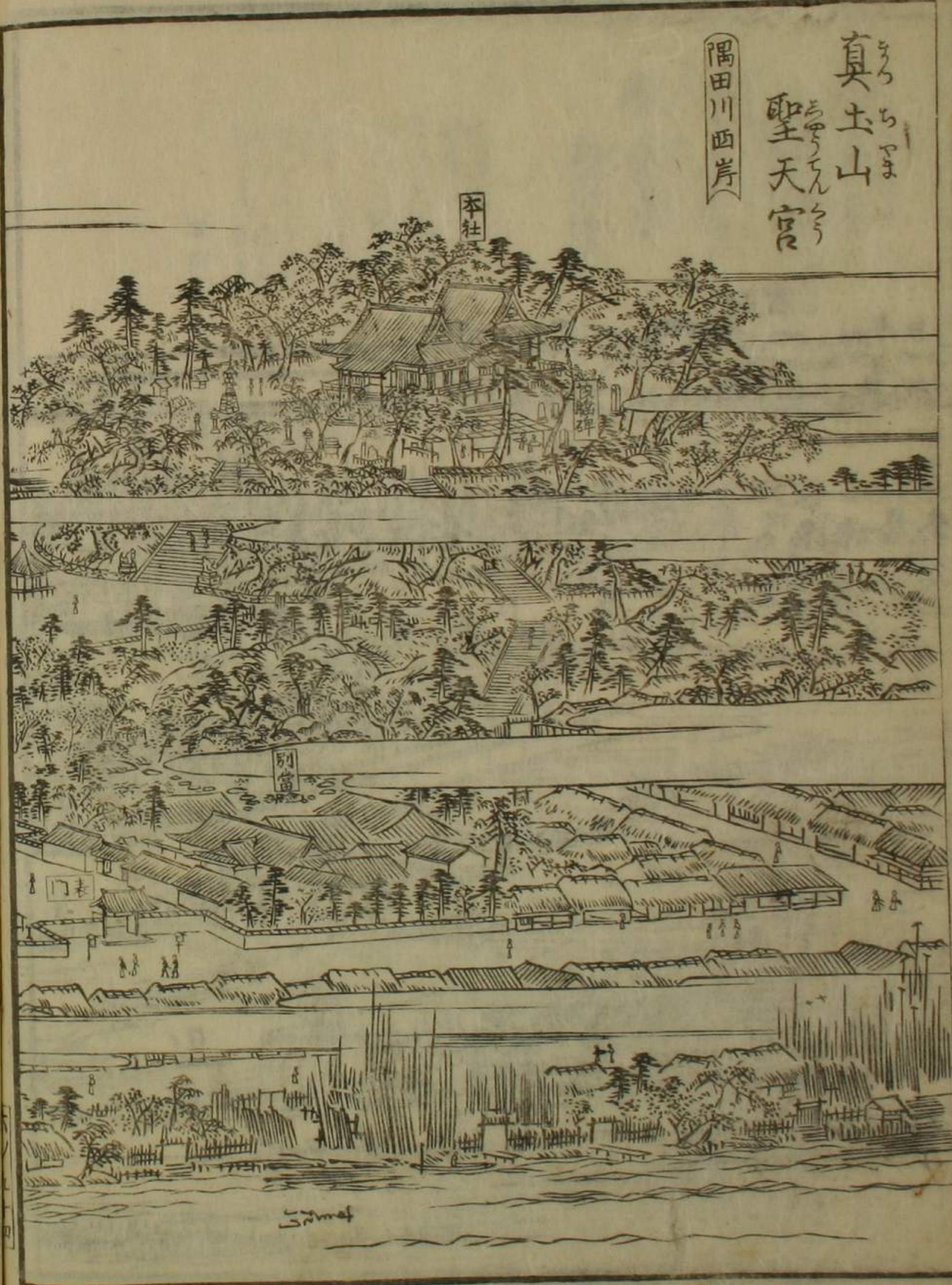
山

の

人

夕

あ



隅田川西岸

真土山
聖天宮

本社

三

時分てもけわみりぬまら山麓茶を焼とこめじをゆく
戸田茶光入道茂晴聖天の宮のわらら
碑を建たり其碑面よ

あられといひ紙て行人もえよまららの山よのこころとこと

按て井桂抄八雲御抄等の時よ万葉集よ載たり赤基法師ら土山の伝を後河國とて催馬楽註秘抄
はふ社の名を方角抄等よ大和紀傳の國境とあり藤原朝よ武蔵國よ入たり或書よ云く大和
信土山角田川ありて盧崎あり後河國田川庵崎ありて土山ありたり今よ土山角田川庵崎
ともありて全くとありたりとてこれとて土山の庵崎ありたり後河國よ土山角田川庵崎ありたり
赤基法師のわらもまらとて後河國よ入りありたりとて土山の庵崎ありたり後河國よ土山角田川庵崎ありたり
菊岡抄云く往在平不の辺海面ありて頂の山を伸たり入津の船の目尚よ若きとて按て今よ土山
ありて土山の庵崎ありたりとて土山の庵崎ありたり後河國よ土山角田川庵崎ありたり
論じたりとて土山の庵崎ありたりとて土山の庵崎ありたり後河國よ土山角田川庵崎ありたり
頃よ土山の庵崎ありたりとて土山の庵崎ありたり後河國よ土山角田川庵崎ありたり

聖天宮 真土山あり 別當は天台宗金龍山奉龍院と号く傳云大同年中の勸請

中て江戸聖天宮才一の靈蹤ありといひ
辨財天祠 山の麓の中馬あり平政子
此所今の形ありの丘陵と東の方を眺をすれば墨田川の流ハ長堤

小傍と濠くたりと近くハ葛饒の村落遠くハ國府臺の翠嶺ましくとも

一ちよハ風を幽越あり

日本堤 聖天所より義輪よある其間凡拾二所祝の長堤あり

六年庚申の歲 台命よ依て荒川水除の爲よ是を筑末せらる

台命を奉り是成能事一級よありとて今よ土山の庵崎ありたりとて土山の庵崎ありたり

新吉原遊女町 日本堤のりよありを俗よ五丁町と唱へたり

頃江府日増繁榮の地とありあり是を傳く肉駁列え吉原の驛よ

遊女屋を始むとする輩二十余人江戸よ移住を其頃ハ定むる花街もれく

ら初こは遊女屋散在せりハ彼輩官よ訴て京橋具足町の東泥沼の地を

築理め一方よ口を假け南の側を角所と唱へ 北の側を柳所といひ
是也 又中の通を伸の町と号け此地ハ傾城所を定發せ
仲の所の旧稱をよむるハ此の地ハ其後庄司甚ち馬つといひる者
以上事跡合考りて載るところあり

官の免を得くえ和三年始て花巷を定め草屋町の末て貳丁



四方の地を賜ひ是乃吉原町と号す
今所謂和泉町高砂所住古所難波町等其地なり
あまのこを賜ひ故に殿塚ともいふなり也を賈して吉原と作るといふ事跡合考をよひ
元禄元年の江戸庵子等の書より其始跡別元吉原よりなりと故にこの号ありと云ふ
明暦二年正月
 落成を告ぐ江府益繁昌一人が夢を告げし明暦二年の冬竟く今この
明暦二年正月
 所めて留地を賜ふ
八月今の地なり
 依て新吉原所と号するといふに批花柳の事
明暦二年正月
 小三都の魁たる其賑は特殊生の花の頂をりて務たりとて春宵一刻の價
せんまゝ
 千金を顧む初秋の燈籠の万字屋の玉菊の追稿よりいふに八朔の白重の
せんまゝ
 巴屋の高橋よ起る今も批目をりて更衣の節とを名りて廿二度の月々の
せんまゝ
 全盛のいふもさらさらのを悉く其美を擧ふといふありと云ふらうとて
せんまゝ
 是を畧す

江戸名所圖會開陽之卷終

